# ジェリー・ルービンの自己啓発的試行錯誤と エスリン研究所

尾崎 俊介

1972 年の 10 月のある日曜日、ニューヨークはソーホーの街を歩く一人の男がいた。太い眉毛に黒い瞳、天然パーマの豊かな黒髪をしたハンサムなこの男、背丈こそ 163 センチとアメリカ人男性の標準より大分低いとはいえ、有り余るエネルギーを身体中から発散させながら闊歩するその若々しい様は、とても 34 歳とは思われない。

図 1　ジェリー・ルービン

が、自分のクルマが止めてある駐車場まで来た時、男の足はピタリと止まった。血圧が一気に上昇し、高鳴る心臓の鼓動に身体が揺れる。その場に立ちすくんだ彼は、一点を凝視しながら自問する――この目の前にあるみじめな鉄屑の塊が、本当に自分の愛車の成れの果てなのかと。[1]

**ジェリー・ルービンの蹉跌**

災難に遭った男の名はジェリー・ルービン（Jerry Rubin, 1938-94）。ベトナム反戦活動の闘士として、あるいは1967年に盟友アビー・ホフマン（Abbot Howard “Abbie” Hoffman, 1936-89）と創設した革命政党「青年国際党（YIP=Youth International Party）」とその支持者たち（通称「イッピー（Yippies）」）のスポークスマンとして、さらには1968年8月にシカゴで開催されたアメリカ民主党大会に侵入し、豚の「ピガサス」を民主党大統領候補に送り込むなどして同大会を騒乱の渦に巻き込んだお騒がせ男として、当時アメリカで知らぬ者のない有名人である。つい数年前まで彼の語る言葉の一言一言、彼の一挙手一投足がもれなく報道され、その言動に全米の若者たちが熱狂した時代の寵児。彼が書いた革命煽動の書『やっちまえ！』（*Do It!: Scenarios of the Revolution*, 1970）[2]は、40万部が飛ぶように売れた。そんなカリスマ革命家のルービンがなぜ、このような目に逢わねばならないのか？

ルービンの愛車を破壊した犯人グループはすぐに判明した。イッピーの中の若い過激派グループ、いわゆる「ジッピー（Zippie）」の仕業だったのだ。彼らはルービンら青年国際党の創設者たちが、30歳を超えてもなおその指導的地位を譲らないことに苛立っていた。今回のクルマの破壊は、そうした苛立ちの表明であり、ルービンに引退を迫る、きわめて分かりやすいメッセージだったのである。かつてカリフォルニア大学バークレー校で学生の政治活動の自由を求める「フリースピーチ運動」――それはルービンが初めて参加した学生運動でもあった――が起こった際、この運動の指導者の一人であったジャック・ワインバーグ（Jack Weinberg, 1940- ）が「30歳以上の大人を信用するな（Don’t trust anyone over thirty.）」というスローガンを唱え、これは1960年代後半のヒッピー・ムーヴメント及びカウンター・カルチャーの中で幾度となく繰り返される歴史的名言となったが、それが当年とって34歳のルービンの身に跳ね返ってきたのだ。

愛車を破壊されてから数時間の後、ルービンは同じくカウンター・カルチャーの名士で旧知のラム・ダス（Ram Dass / Richard Alpert, 1931-2019）を呼び出し、この一件について悲憤慷慨した。一体なぜ自分がこれほどの仕打

ちを受けなければならないのかと。それに対してラム・ダスは、ルービンに次のようなアドバイスをした。「奴らがまた同じことをしにきて、君も仕返しをしたいと思うなら、遠慮せずにたたきのめしちまえよ。ただし愛をもってだがね」。[3]

怒りに任せてではなく、愛をもって復讐せよ――要するに「怒るな」ということであろうが――ラム・ダスのその言葉を聞いた瞬間、ルービンから一つ、憑物が落ちた。「革命のリーダーであり続けなければならない」という憑物が。

思えば 1965 年 5 月、ベトナム反戦活動の一端としてベトナムに兵員を送る軍用列車の運行を邪魔する活動に携わって以来、ルービンはカウンター・カルチャー革命の最前線に立ち続けていた。1967 年には革命の中心地カリフォルニア大学バークレー校のあるバークレー市で市長選に立候補し、学生運動を抑えつけようとする大学及び市の上層部に揺さぶりをかけた（得票率 20%で落選）。同年 8 月 24 日にはアメリカ資本主義の強欲ぶりを批判すべく、同志アビー・ホフマンらと見学者を装ってニューヨーク証券取引所に忍び込み、天井からドル札の雨を降らせて取引所に騒乱を巻き起こすということもした。

無論、市長選立候補と証券取引所の件は、革命というより反逆的な若者の遊び心の発露といったところではある。が、同年 10 月 21 日、政治活動家デイヴィッド・デリンジャー（David Delinger, 1915-2004）の呼びかけに応じて首都ワシントン・リンカーン記念堂で行われた 10 万人規模のベトナム反戦集会に参加し、その内の 5 万人の大群衆を率いてアメリカ国防省ペンタゴン内部への突入を試みたとなると穏やかではない。この時、ペンタゴン突入のもくろみ自体は警備に当たった米軍第 82 空挺師団の兵士たちによって阻止されたものの、兵士たちが構える M14 ライフルの銃口にデモ隊参加者の一人ジョージ・ハリス（George Edgerly Harris III、当時 18 歳）がカーネーションの花を一輪ずつ挿していく様を写した写真（次頁参照）は、『ワシントン・イヴニング・スター』紙に掲載され、「フラワーパワー」を象徴するものとしてピューリッツァー賞候補となった。この写真も含め、アメリカの世論がベトナム反戦の方向に大きく傾いていることを内外に広く伝えた点で、ル

ービンの思いつきから始まった「ペンタゴン大行進」は、ある意味、大成功だったのである。

図 2　1967 年 10 月 21 日、ペンタゴン大行進での「フラワーパワー」

なお、ルービンはペンタゴン突入を企図した責任を問われるべく、下院非米活動調査委員会（HUAC）に召喚されるのだが、アメリカ独立革命時の軍服姿やサンタクロースを模した衣装を身にまとって証言台に立とうとし、委員会の側から逆に証言を阻まれる始末。実質無罪放免になった上、旅費はすべて政府持ちでカリフォルニアからワシントンまでの往復旅行が楽しめたこの結末に、ルービンは大いに笑った。[4]

だがジェリー・ルービンの名声（悪名？）を不動のものにしたのは、先にも触れた 1968 年 8 月の民主党大会への乱入事件である。彼はこの一件に関わったとして後に「シカゴ 7 」（The Chicago Seven）として知られるようになる面々、すなわちアビー・ホフマン、トム・ヘイデン（Tom Hayden, 1939-2016）、レニー・デイヴィス（Rennie Davis, 1940-2021）、デイヴィッド・デリンジャー、ジョン・フロイネス（John Froines, 1939-2022）、リー・ウェイナー（Lee Weiner, 1939- ）らと共に起訴されるのだが、1969 年 9 月から始まったこの裁判の模様は、出廷の度に趣向を凝らしたルービンの挑発的な服装の効果もあって世間の注目を集め、1972 年 11 月の最終結審（シカゴ 7 に

与えられた判決は、実質的には無罪と言っていいものであった）まで全米の話題をさらい続けた。『グーテンベルグの銀河系』（*The Gutenberg Galaxy: the Making of Typographic Man,* 1962）で知られるメディア論の論客、マーシャル・マクルーハン（Herbert Marchall McLuhan, 1911-80）の信奉者であったルービンからすれば、マスメディアを利用した劇場型のパフォーマンス（ルービン自身の用語を使えば「ゲリラ・シアター」）はその最も得意とするところであり、この長きに亘った裁判は、ルービンにとってこの上ない晴れ舞台となった。そして裁判自体を茶番化する彼のパフォーマンスは、カウンター・カルチャーを支持する若者たちはもとより、広くアメリカの一般大衆を熱狂させたのである。1960 年代後半のジェリー・ルービンは、政治的アイコンとしては時の大統領、リンドン・ジョンソンやリチャード・ニクソンよりもはるかに人気があったのだ。そしてルービン自身、己の全能感に酔っていた。

だがそれは 1960 年代末までの話。1970 年代に入ると、ルービンは失速する。

失速の手始めは、意外なことに、私生活の破綻だった。1965 年に政治活動を始めた時に知り合い、人生の伴侶と思ってきた恋人ルーシーから一方的に別れを切り出されたこと。革命家としては無双であったルービンは、実は恋人の心変わりによって心身崩壊を来すほど繊細な男だったのだ。[5]

ルーシーとの別れをきっかけとして、ルービンは自分自身の実情に目覚め始める。自身の男性性の弱さを気取られないためにルーシー以外の女性との付き合いを意識的／無意識的に避けてきたこと。膨大な数の知人がいる割に真の友人と呼べる人間がいないこと。彼を英雄視するファンからの手紙は毎日大量に届き、取り巻きの中にはルービンが主催するデモに参加する勇気が持てないことを恥じ、泣いて詫びる人までいたけれども、今のルービンには彼らが崇拝しているのが実存在としてのルービンなのか、それとも単なる政治的アイコンとしてのルービンなのか、もはや区別がつかなかった。

そしてその虚像ぶりが自身の目にも明らかになるにつれ、自分を英雄視するファンたちの本当の願いがどこにあるのかを、ルービンは悟ってしまう。

英雄であることについて僕はひとつの発見をした。英雄の崇拝者は、ひ

そかに英雄の死を願っているのだ。多くの青年たちが僕を称えにやって来ながら、僕が贋者である証拠をかぎまわっていた。もし永遠に英雄でありつづけたいのならば、その唯一の手段は死ぬことである。青年たちが僕に望んだのは、死か、あるいは少なくとも投獄されることだった。[6]

死にもしなければ投獄もされない34歳のルービンに、英雄の資格はない。革命家ジェリー・ルービンの賞味期限は、明らかに尽きかけていた。

否、尽きかけていたのはアメリカにおけるカウンター・カルチャー革命それ自体の命脈だったかもしれない。ルービンの革命仲間の一人であった作家のティト・ゲラシ（John “Tito” Gerassi, 1931-2012）が1960年代の終わり頃、「結局俺はチェ・ゲバラにはなれないんだ。最近それがわかったよ」[7] と悲しげにルービンに語った言葉からも窺い知れるように、革命の火は既に消えかけていたのだ。

この事態に焦ったルービンは、最後の望みをかけ、ビートルズのジョン・レノンに近づく。カリスマ・ロックスターの政治へのコミットを促し、これを革命継続のための起爆剤にしようと試みたのである。だがその試みも、時の司法長官ジョン・ミッチェルがちらつかせた国外退去の可能性を危惧したレノンが、ルービンと距離を置き始めたことであっさり潰えた。[8] さしものルービンも、大きな時代の流れには逆らえなかったのだ。それまで散々ルービンに利用されてきたマスコミは、ここぞとばかりルービンへの復讐を開始した。彼の名前が新聞に載る時は、「あの人は今？」コーナーに限られるようになっていた。劇場型の政治パフォーマンスを得意とするルービンを封じ込めるには、彼に「過去の人」の烙印を押すことが最も効果的であることを、マスコミはよく知っていたのである。

そして自分が過去の人になりつつあると気づき始めた折も折、下の世代の過激派たちから例の愛車破壊の最後通牒を受けたのだから、彼らに対して怒りの拳を振り上げたところで意味はない。先の「怒るな」というラム・ダスのアドバイスがルービンの腑に落ちたのは、まさにこの瞬間である。そしてこれ以後、ルービンは革命の英雄としての自己認識を放棄する。彼は人生の次のステージに進むべき時を迎えていたのだ。

**ジェリー・ルービンの自己改革**

では、マスコミからの揶揄的な「あの人は今？」という質問に、ルービンはどう答えたのか？

革命継続の夢が絶たれた時、ルービンが以後差し当たって自分のなすべきことと思い定めたのは、意外なことに「自己改革」だった。要するに、自分を変えるということ。このアイディアは、天啓として突如彼の脳裏にひらめいたのだった。

> ある日のこと、僕がニューヨークの街を歩いていると、突然ひとつの啓示が心にひらめいた。「まだ成長する道は残されている。自分の古いイメージから抜け出せれば、人生をもう一度やり直し、何か新しいことを始めたり、自分自身をもう一度生き返らせることができる」 そう感じたのだ。[9]

先に名を挙げたティト・ゲラシもそうだが、「政治の時代」だった 1960 年代のアメリカの急進派リーダーたちは、ニュー・ジャーナリズム作家トム・ウルフ（Tom Wolfe, 1930-2018）が命名した「個人主義の時代（“Me” decade）」である 1970 年代の揺れ戻しに対応できず、次々とアイデンティティ崩壊を起こしていた。かつての同志たちのそんな悲惨な状況を目にしていたルービンからすれば、古い自分から脱却するための自己改革は、「自分自身をもう一度生き返らせる」ために、どうしても成し遂げなければならないことだったのだ。

かくして、ルービンのサバイバルのための試行錯誤が始まった。

何しろ小柄な体躯に充満するエネルギーを持て余しているような男である。自己改革に取り組むと決意した彼を引き留める術はない。ルービンは、手の届く範囲にあるありとあらゆる機会を捉えて自己改革の道を突き進んだ。彼はとりあえずニューヨークからサンフランシスコに居を移すと、当時栄養学の大家として名を挙げていたアデル・デイヴィス（Adelle Davis, 1904-74）や、有機農業の提唱者 J・I・ローデイル（Jerome Irving Rodale, 1898-1971）のアドバイスに従って食べるものは健康食品とニンジンジュースと多量のビ

タミン剤に限り、牛豚肉食を避け、菓子と炭水化物を絶った。水泳を始め、ジョギングをし、サウナ風呂に入り、モダンダンスと太極拳とヨガを習った。体重はたちまち 10 キロ以上減った。[10]

だが、自己改革に取り組み始めたルービンにとって、身体的な健康を回復することよりも重要だったのは精神的な健康の回復であった。彼は本来自分がどういう人間であって、それがどういう経緯で進むべき方向を間違い、破綻しかけた人間になってしまったのかを突き止めたかったのだ。本当の意味での健康な人間に戻るためには、根本的な自分探しをする以外ない。

**ロルフィング**

そんな自分探しのために、まず彼が試したのは「ロルフィング」だった。ロルフィングとは、生化学者アイダ・ロルフ（Ida Pauline Rolf, 1896-1979）が開発したボディ・ワークの一種。重力の影響、精神的ストレス、偏った生活習慣など、人が生きて行く過程で体内に溜め込んだ種々の緊張を、資格を持った施術師によるマッサージによって排出させ、身体の健全なバランスを回復させるというもの。マッサージとは言い条、実際には施術師の肘や拳が患者の身体に深く埋まるほど激しい圧をかけるもので、場合によっては相当な痛みを伴う。それでもルービンはこの施術を 10 回ほど耐え忍び、心なしか身体のバランスが良くなった気がしたという。が、そんなもので満足するルービンではない。[11]

**バイオエナジェティック療法**

彼が次に試したのは「バイオエナジェティック療法」。これは心理療法家アレクサンダー・ローウェン（Alexander Lowen, 1910-2008）が創始したボディ・ワークで、ローウェンの師であるオーストリアの心理学者ウィルヘルム・ライヒ（Wilhelm Reich, 1897-1957）の「性格の鎧（character armor）」説を理論的バックグラウンドとしている。「性格の鎧」とは、周囲の社会に合わせるため、自分本来の感情や欲求を押さえつけ、生体エネルギーの自然な流れを滞らせてしまっている状況を指すライヒ独特の用語であり、ライヒによれば、この鎧をまとっていることの当然の帰結として、人は神経症を患うのだ

という。ゆえにローウェンのバイオエナジェティック療法では、マッサージによってこの「性格の鎧」を物理的に破壊し、さらに正しい呼吸法を学ぶことによって精神的健康を取り戻すことを目指すことになる。ルービンはこの療法を 10 回ほど試してみて、深呼吸することの快感に気づくようにはなったが、療法士が料金を 1 時間 35 ドルから 1 時間 40 ドルに値上げすると言い出した時、それ以上続ける意欲を失った。

**ゲシュタルト療法**

「ロルフィング」「バイオエナジェティック療法」と立て続けにボディ・ワークを試してみて、少しそれに飽きてきたルービンは、今度はより直接的に精神面での自己改革に取り組むべく、心理療法を試してみることにした。

そんな彼がまず選んだのが「ゲシュタルト療法」である。[12] これはフレデリック・パールズ（Frederick Salomon Perls, 1893-1970）というベルリン生まれの精神分析医が開発した心理療法で、過去のトラウマに注目するフロイト派の精神分析とは異なり、「今、ここ」での気づきを重視する。今、ここで自分が何を感じているか、そしてそれをいかに感じているかを言語化することで、無意識化され未完結状態に置かれていた問題を意識の前面に引っ張り出し、それを再体験する作業を通じて、その問題からの卒業を促すのである。

もっともこの療法は、ルービンに心の平安を与えることよりも、むしろ彼を新たな疾風怒濤に巻き込むことになった。彼の担当になった療法士のローダに初めて対面した時、一瞬にしてルービンは彼女に恋してしまったのだ。以来、二人は互いに強烈に惹かれ合い、すぐに生活を共にすることを決めただけでなく、世界中を二人で飛び回って楽しんだ。

だが、そうやって暮らしているうちに、二人の間の齟齬も明らかになっていった。互いに深く愛し合いながら、激しく対立することも増えていった。ルービンは家庭をもって落ち着きたい気分になっていたが、ローダは逆に自分を世間に売り出したかった。二人で活動していると、世間は有名人のルービンにばかり注目したが、ローダにはそれが我慢できなかった。ルービンはローダを独り占めしたかったが、ローダは自由恋愛の自由を手放さなかった。「今、ここ」に執着し続けることを旨とするゲシュタルト療法の療法士とし

て、ルービンに夢中になることは彼に依存することを意味し、それはローダにとって許しがたい行為だったのだ。だがルービンの方はローダに執着し、依存していたのである。

結局、二人の仲はうまく行かなくなり、ルービンとローダは別れることとなった。無論、それはルービンにとって非常に辛い経験となったのだが、その辛さを克服するのに一役買ったのが、彼が次に試した「フィッシャー・ホフマン心霊療法」であった。

**フィッシャー・ホフマン心霊療法**

フィッシャー・ホフマン心霊療法[13]とは、紳士服のセールスマンだったボブ・ホフマン（Bob Hoffman）が、友人であった（とホフマンが主張する）ドイツからの亡命精神科医シークフリード・フィッシャー（Siegfried Fischer）の霊に導かれて作り上げた心霊療法で、そのコンセプトは、生まれてから13歳までの間に植え付けられた精神的条件付けから脱することによって、本来の自分を取り戻すというもの。子供時代に条件付けを行うのは、その子供の親であることが多いのだから、この療法のキモは「親からの精神的独立」ということになる。

だがこの療法の特異なところは、実はそこではない。この療法が「心霊療法」であるというところが重要で、この療法を遂行するためには、体験者が自身の守護霊と接触し、その霊を「導き手」にしなければならないのだ。そこでルービンが半信半疑ながら自分の守護霊との接触を試みたところ、何と本当に霊は降りてきた。それは女性の霊で、「ローレイン」と名乗ったという。かくして、以後、ルービンはローレインをガイド役にしつつ、知らないうちに自分をコントロールしてきた両親からの精神的条件付けを解明していく。

その結果、ルービンは「他人から愛されることの拒絶」「母親への依存」「他人の優劣の判定癖」「罪悪感」「陰鬱さ」「競争志向」「女性嫌悪」「父親への尊敬の強要」「内面の弱さと外面の強さ」「我を通すための暴力志向」「生き急ぐこと」「女性の拒絶」「現実よりイメージを重視する志向」といった数々の負の遺産を両親から、特に母親から、植え付けられてきたことを生まれて初めて自覚する。そしてその結果、自分が「男性優越主義の男性側の犠牲者」で

あったことを理解するのだ。その辺り、ルービン自身の言葉を見てみよう。

> 僕は男性優越主義の男性側の犠牲者である。僕は子供の頃、生きるためには女性が不可欠だと母に教えこまれた。もし母が僕を愛してくれなければ、僕には何の価値もなかったのだ。そのため、僕は今まで女性（母）の愛に焦がれてきた。ところが、母の中にはもうひとつ、自分を嫌悪し、自分の役割を嫌うという一面があった。その結果母は、「生きるためには女性の愛が不可欠である。しかしその愛を与えてくれる女性を軽蔑せよ」と僕に教育したのである。[14]

では、ルービンの母に男性優越主義を刷り込み、女性である自己を嫌悪するように仕向けたのは誰かといえば、それは彼女の父と 4 人の兄たち（ルービンの母方の祖父と叔父たち）であった。ルービンが「自分は男性優越主義の男性側の犠牲者である」と言うのは、その意味である。ルービンがこれまでルーシーやローダなど幾人かの女性と付き合ってきて、それが結局、不毛な結果に終わったのも、彼が彼女たちを必要としながら軽蔑するといった条件付けゆえであり、その意味で彼の個人的な問題は先祖から代々伝わってきた問題、すなわち「カルマ」だったのだ。

そのことを知ったルービンは、まず既に鬼籍に入っている両親を徹底的に罵倒し尽くし、次いで今度は彼らの罪を許すことで、彼らの呪縛から解放されることになる。そして、あらためて他人（＝女性）を（利用するのではなく）愛したいという切望を抱くに至る。フィッシャー・ホフマン心霊療法は、守護霊の活用などという前近代的な側面を持ちながら、少なくともルービンの人間的成長に一役買ったと言うことができるだろう。

**エスト**

ルービンが次に試したのは、「エスト」である。エストとは、ワーナー・エアハード（Werner Erhard, 1935- ）なる人物が創設した自己啓発セミナーの一種。1970 年代初頭のサンフランシスコ界隈におけるエストの盛名は非常なものだったので、ルービンがエストのセミナーに参加したのは、当時として

当然の成り行きであった。[15]

エストの創設者であるエアハードは、本名をジョン・ポール・ローゼンバーグ（John Paul Rosenberg）といい、その名からも推測されるようにルービンと同じユダヤ系で、ペンシルバニア州フィラデルフィアで小さなレストランを営んでいた父のもとに生まれた。1953 年、高校卒業と同時に結婚し、4 人の子供に恵まれるものの、1960 年に愛人を作ってミネソタ州セントルイスに逃亡。名前をワーナー・エアハードに変え、自動車のセールスマンとなる。このセントルイス時代、彼はナポレオン・ヒルの『思考は現実化する』（Napoleon Hill, *Think and Grow Rich*, 1937）とマックスウェル・マルツの『サイコ・サイバネティクス』（Maxwell Maltz, *Psycho-Cybernetics*, 1960）という自己啓発本の名著を読み、大きな影響を受けたという。その後 1962 年からとある雑誌（『ペアレント』誌）の編集者となり、カリフォルニア州サンフランシスコに移住、そこで編集部の同僚からアブラハム・マズロー（Abraham Harold Maslow, 1908-70）やカール・ロジャーズ（Carl Ransom Rogers, 1902-87）など「ヒューマニスティック心理学」（後述）の創始者たちの情報を耳にし、この運動に興味を持つ。またアメリカに日本の禅を紹介したことで、当時「時の人」となっていたアラン・ワッツ（Alan Watts, 1915-73）のセミナーに参加したことから禅仏教に目覚め、その後訪日して臨済宗の老師・山田無文の指導下で禅の修行も経験している。さらに 1967 年には自己啓発思想家として名高いデール・カーネギー（Dale Carnegie, 1888-1955）の自己啓発セミナー（カーネギー自身はこの時既に鬼籍に入っていた）にも参加するなど、1960 年代のエアハードは、この時代のありとあらゆる自己啓発的ムーヴメントの味見をして回っていたことになる。

そして 1970 年、彼はアレクサンダー・エヴァレット（Alexander Everett, 1921-2005）によってその 2 年前にテキサスで創始された自己啓発セミナー組織である「マインド・ダイナミクス」（Mind Dynamics）のサンフランシスコ・ロスアンゼルス支部で講師を務めるようになる。このエヴァレットという人物もエアハード同様、ブラヴァツキー夫人（Helena Petrovna Blavatsky, 1831-91）の「神智学」、「眠る預言者」ことエドガー・ケイシー（Edgar Cayce, 1877-1945）の「心霊術」、さらにホセ・シルヴァ（José Silva, 1914-99）の「シ

ルバ・マインド・コントロール法」など、この時代に流行した様々な自己啓発法をこき交ぜて自らの自己啓発法を編み出した人物だが、そんなエヴァレットのマインド・ダイナミクスの講師になったことで、エアハードはいわゆる「自己啓発セミナー」の運営に直接関わるようになり、翌 1971 年にはついに自ら開発した自己啓発セミナーとして「エスト」(est) を起ち上げることになる。「エスト」とは「Erhard Seminars Training」の略であるが、「est」をラテン語として読めば「それは存在する」という意味になり、人間の深奥にある「真の自己」を指す言葉とも解釈できる。「エスト・トレーニング」の狙いは、セミナー参加者の「真の自己」を引き出し、他者の思惑に洗脳されることなく自身の真の願望に基づいて生き始められるよう、人生の舵取りを指南すること、であった。

では、それは具体的には何をすることなのか。ここからはこのセミナーに参加したルービンの体験から、エストの実際を見て行こう。

200 ドルを支払ってエストの自己啓発セミナー参加したルービンは、まず 250 人もの大勢の参加者たちと共に丸 4 日、一日 18 時間もホテルの宴会場に詰め込まれ、飲食も一切なしに椅子に座ってエアハードやその他エストの講師たちの講義（「体をコントロールするのは自分であり、体が自分をコントロールのではない！」等々）を受けさせられたという。この間、受講者には（講師に尋ねられた時以外）発言が禁じられる。講義が終われば今度は受講者たちが一人ずつ演台に乗せられ、マイクの前で自分の人生の来し方やライフスタイルなどを偽ることなく語らされ、それに対して講師たちがその欺瞞性について徹底的に批判を浴びせる。いわば圧迫面接のようなものである。しかも受講者たちは退室することが禁じられ、中座などしようものなら途端に係員によって連れ戻されるというのだから、圧迫面接から逃げることすらできないのだ。

このように受講者を精神的に追い詰めておいて、エアハードが何をしたかったのかと言えば、「自分の身の上に起こるあらゆる出来事は、自分自身が生み出しているのだ」ということを受講者に腹の底から理解させること。そのために彼は敢えて挑発的なロジックを受講者たちに投げかける。「ベトナムの赤ん坊は自らに降りかかるナパーム弾を生み出し、ユダヤ人はアウシュビッ

ツを生み出し、強姦された者には強姦願望があったのだ」と。こうしたエアハードの挑発に、はじめのうちこそ怒号で応えていた受講者たちも、圧迫面接的な状況が生み出す異様な空気に飲まれて平常心を失い、次第にエアハードの導く方向になびき出す。事実、ルービンと一緒にこのセミナーに参加した受講者たちはそれぞれ自分の過去のトラウマを振り返りながら、「自動車事故の責任は、私にあったのかもしれない」「癌を生み出したのは僕自身なんだ」「たぶん俺が、母親を殺したんだ」「私は無力な被害者なんかじゃないかもしれない」などと次々に口走り始めたという。

こうしたエアハードの一連の洗脳的策略に対し、当然のことながらルービンは抵抗する。持ち前の反抗心が頭をもたげ、エアハードなるインチキ臭い人物の前に 200 ドルを差し出した上で自己をさらけ出し、否定され、嘲笑され、支配されるなど御免だと考える。しかしエアハードに対して自己防衛に努めているうちに、ルービンは自分が若い頃から「自分は正しい、相手は間違っている」というロジックに頼って自己防衛をし続けてきたことにハタと気づく。習慣化し、癖になった自己防衛の鎧を脱がないことには、エアハードの主張を理解することはできないだろうと悟ったルービンが、思い切ってその鎧を脱いだ時、彼に一つの啓示が訪れる。

> 僕は自分の物語を細かな点に至るまですべて自らつくりあげていたのだ。（中略）人生に起こったあらゆる事件や体験を生み出し、それを僕が経験したように実現させていったのは、ほかならぬ僕自身なのだ。そう気づいて、僕は完全に自由になった気がした。そしてこれ以上ない強靭さと死ぬほどの今日を同時に味わった！　もう二度と自分に嘘はつけないのだ。
>
> ワーナー（＝エアハード）は、永遠に消えることのない意識変革を僕に施した。僕は自分の身の上に起こるすべての事柄に責任をもたなければならない。もし自分が惨めな状態にいるならば、それは自分が惨めさを選んだということなのだ。選択権は自分にある。好きになるも嫌いになるも、選ぶも選ばないも、自分が自分の人生の主人公になるかどうかさえも。[16]

それだけではない。この後、ルービンはエストでのセミナーを通じ、自分が常に頂点を目指し、それが達成されるとそこに居続けることに汲々として、一度たりとも充足感を経験したことがないことに気づく。彼が気にかけていたのは明日のことばかりだったのだ。そんなルービンにエアハードの獅子吼が襲う。「明日などない！　今このときがあるだけだ！」と。そしてルービンはエアハードの言を完全に理解する。

> 六〇年代に政治活動家だった頃、僕はつねに目標に向かって努力してきた。だが、心に思い描いた目標を一度たりとも達成したことはなかった。目標に目を向け続けるかぎり、僕は失望を味わい続けることになった。だが、もし目標に向かって努力する過程、つまり現実そのものに目を向けていれば、不満を感じることなどなかったのである！[17]

傍から見ると、とてもまともな自己啓発セミナーとは思えないエストではあるが、それに実際に参加したルービンがかくのごとく圧倒的な意識改革を達成し、幸福な人生を送るために自分に何が足りなかったのか、ということにまで目を開かれたというのであれば、これはこれで効果的な自己啓発の手法であると言えるのだろう。

**アリカ・トレーニング**

ルービンが自己再生のための意識改革として最後に試したのが、40 日間に及ぶ「アリカ研究所（Arica Institute）」での修行であった。[18]

アリカ研究所とは、人間の性格を 9 種に分類する「エニアグラム」という性格判断法を確立したことでも名高いボリビアの神秘学者オスカー・イチャーソ（Oscar Ichazo, 1931-2020）が、チリのアリカという都市で 1968 年に設立した「アリカ・スクール（Arica School）」のアメリカ支部（1971 年設立）であり、ここでは設立者イチャーソの思想に基づき、人間がその幼少期の環境／人間関係等によって無意識の内に築き上げてしまう自己イメージ（self-image）ないし心理的自我（psychological personality）から脱却し、本来の自分を取り戻すことを目標とする自己啓発的トレーニング・センターである。

アリカの基本哲学は「精神性は肉体によって表現されなければ何の意味もない」というところにあり、これを換言すれば「人間は考え過ぎだ」ということになる。無駄な思考によって心が一杯に満たされているため、身体のエネルギーが限りなくゼロになり、この状態が人間を生き辛くさせているのであって、これを改善するのがアリカの眼目なのだから、当然、アリカでのトレーニングは、心を空にして身体に意識を持っていく、という方向性のものになる。実際、身体運動や正しい呼吸法、そして瞑想はアリカでの日課であり、これらの身体活動を通じて受講者が「頭で判断を下すのではなく、目で見、肌に触れ、体で体験できるような人間」になることが目指される。

アリカ・トレーニングを受講したルービンにとって最もきつかったのは、40 日間の修行のクライマックスを飾る「砂漠」というトレーニングであった。これは本も電話も音楽も筆記具もない部屋で 48 時間を過すというもので、要するに外部からの刺激を一切断ち切って自己と直面し、「内観」の力を高めることを狙った一種のシゴキである。このトレーニング中、ルービンは悪夢に襲われ、幻想を見、何度もパニックに陥りそうになったが、それでも何とか乗り切った。

アリカでの 40 日間のトレーニングを完遂してルービンが得た悟りは、「人生の苦痛はすべて精神的なものである」ということ。「他人に傷つけられた」と感じたとしても、それは自分の心がその「傷」なるものを信じ、それを身体に覚え込ませているだけのことであって、自分を傷つけているのは自分自身に他ならない。このプロセスを自覚し、見破ることで、人間は外界からの悪影響から自由になれる。アリカでのトレーニングを通じ、ルービンは自分自身の「観照者」になる術を身につけたのである。

そして観照者として自己の人生を振り返った時、ルービンは自分の人生が「幻想」によって振り回されてきたことを痛感する。祖国イスラエルへの幻想、革命の原点キューバへの幻想、アメリカに革命を起こすのだという幻想、完全無欠な恋人を得たいという幻想。そうした幻想は一つも現実にはならなかったけれども、しかしその一方で、そうした数々の幻想こそがルービンの生の原動力となり、彼の人生を前へ前へと進めてきたことも事実。そうした自分の人生の真実がひとつの啓示として走馬灯のように彼の前に現れた時、

ルービンは「純粋な時」を経験する。宇宙がひとつになり、今この時となる瞬間。そしてこの瞬間を経験したルービンは、それまでに行なってきた数々の自己啓発的試行錯誤のすべてを踏まえ、「何をするにせよ、今していることを楽しまなくてはならない」という究極の悟りに到達する。そして 37 歳になった今も、自分が成長し続けていることを確信する。

3 年間に亘ったジェリー・ルービンの「自分探しの旅」は、ようやく一つの着地点に到達したのである。

## 自己啓発のメッカ、サンフランシスコ

以上、34 歳の時にニューヨークを離れて以来、37 歳までに（元）革命家ジェリー・ルービンが新天地サンフランシスコで経験した自分探しの旅の航跡を大まかにたどってきたわけだが、その旅の内容は食事改革、ジョギング、水泳、サウナ、太極拳、ヨガ、モダンダンス、ロルフィング、バイオエナジェティック療法、ゲシュタルト療法、フィッシャー・ホフマン心霊療法、エスト、アリカと多岐に亘る。否、紙面の都合でこれだけに限ったが、ルービンが試した自己啓発的実験の数は、実際にはこの倍ほどにもなる。

となると当然、湧き上がってくる一つの疑問がある。なぜこれほど多くの試行錯誤を、ルービンはサンフランシスコで経験することが出来たのか、という疑問である。一体なぜこの時代、サンフランシスコは自己啓発のメッカになっていたのか？

実は、この問いに対する答えは一言で済む。「そこにエスリン研究所があったから」。そう、すべてはエスリン研究所から始まっていたのだ。

ではそのエスリン研究所とは一体何なのか？

## エスリン研究所

エスリン研究所（Esalen Institute）は、サンフランシスコから南方に 190 キロほど下ったビッグ・サーという海沿いの町にある温泉施設付きの非営利研究所である。なお、日本では、ウィキペディアの記述をはじめ、「エサレン」と表記されることが多いが、実際の発音とイントネーションは「レスリング」に近く、「エスリン」と表記した方が原音を正しく反映する。[19] 以下本論で

は「エスリン」という表記を用いる。

さて、そのエスリン研究所がある 30 エーカー（12 万平米、東京ドーム 2.5 個分）ほどの海沿いの温泉地は、19 世紀後半にこの地に入植したトマス・スレートの名にちなんで「スレート温泉」と呼ばれていたが、その後近隣の町サリーナスの医師、ヘンリー・マーフィーによって 1910 年に買い取られた。ヘンリーはドイツを旅行していた時に、温泉地として有名なバーデン＝バーデンに立ち寄って以来、温泉の魅力に取りつかれ、スレート温泉をバーデン＝バーデン的な湯治観光地にしたいと考えてこの土地の購入に及んだのである。しかし第一次世界大戦の勃発などもあり、その夢はすぐには叶わなかった。

その後、ヘンリーは妻ヴィニーの内助の功もあって病院経営に成功し、息子のジョンも弁護士として名を成し、一族は繁栄する。そしてその繁栄の勢いに乗って 1937 年、マーフィー家はこの地に最初の別荘を建設し、以来スレート温泉はマーフィー一族によって別荘兼ゲストハウス的に使われることとなった。ジョン・マーフィーの二人の息子のうちの一人、後にエスリン研究所を起ち上げるマイケル・マーフィー（Michael Murphy, 1930- ）が幼少期に夏を過したのはまさにこの別荘である。ちなみに、マーフィー一族と親しかったサリーナス在住のノーベル賞作家ジョン・スタインベック（John Steinbeck, 1902-68）の代表作、『エデンの東』の主要登場人物であるケイレブ（キャル）とアーロンの双子の兄弟のモデルとなったのがこのマイケルと弟のデニスで、実際、若い頃のマイケルは小説中のキャルと同様に内向的で愛想が悪く、デニスはアーロンに似て外交的で人当たりのいい青年だったという。[20]

**マイケル・マーフィーの迷走**

さて、その内向的な若き日のマイケルは、迷走していた。宗教や哲学に親しんだ高校時代を経て、医者になるべく地元の名門スタンフォード大学医学部予科に進学するも、有機化学などの科学系諸科目に興味が持てず、その一方、フレデリック・スピーゲルバーグ教授（Frederic Spiegelberg, 1897-1994）の東洋宗教の講義を聴いて大いなる啓示を得て以来、インドの宗教的社会活

動家シュリー・オロビンド・ゴーシュ（Sri Aurobindo Ghose, 1872-1950）の思想に夢中になってしまったのだ。またこの時期、彼は生涯の趣味となるゴルフと瞑想にも熱中するようになっていた。

やがて家族の反対を押し切って医学の道を断念したマイケルは心理学専攻に転じ、文学士として 1952 年にスタンフォード大学を卒業すると、徴兵に応じて 2 年間従軍。軍務を終えたマイケルはスタンフォード大学の大学院に進学し、一時は教授職を目指すが、欝が高じて退学。その後、1956 年 4 月にかねてからの念願を叶えるべく、インドでシュリー・オロビンドのアシュラム（僧院）に入門して修行僧のような日々を過ごすことを決意する。なお、余談になるが、マイケルはインドに向かう途上、アマチュア・ゴルファーとしての夢を叶えるべくスコットランドに立ち寄り、当地の有名なゴルフ場、セント・アンドリューズでプレイをしている。かつて弟のデニスが兄を評して言った「ゴルフをするヨガ行者」という言葉が、そのまま実現したわけである。

オロビンドのアシュラムで 1 年半ほど過ごしたマイケルは、アシュラムの実態に若干の失望を抱きながら帰国する。その後、慣れ親しんだスタンフォード大学の近くにアパートを借りると、近隣のホテルでボーイのアルバイトをしながら、有り余る時間を瞑想と読書、それにセント・アンドリューズでゴルフをした経験を元にした小説『王国のゴルフ』（*Golf in the Kingdom*, 1971）[21] の執筆に費やした。そしてこの 2 年間に亘る長いモラトリアムの期間中に、マイケルは後にエスリン研究所を創立する際、共同創立者となる相棒リチャード（＝ディック）・プライス（Richard “Dick” Price, 1930-85）と出会うことになる。

### ディック・プライスの混迷

ディック・プライスことリチャード・プライスは、リトアニアからアメリカに移住してきたユダヤ系移民の子である。しかし父親のヘルマンが一族の名前の綴りを「Preis」からイギリス風の「Price」に変えてユダヤ系の痕跡を消し、さらにメソジスト派の家庭の娘と結婚、仕事に関しては通販で名高いシアーズ・ローバック社の管理職を務めていたことから、暮らしぶりは典型

的なアングロサクソン系のアッパー・ミドルクラスそのもので、ディック本人も自分がユダヤ系であることは成人するまで知らなかったという。

大学はスタンフォード大学に進学、「ダブルバインド」という概念を生み出したことで知られる人類学者グレゴリー・ベイトソン（Gregory Bateson, 1904-80）の下で心理学を学び、1952 年に卒業すると、ハーバード大学の大学院に新設された社会関係学部に進んでいる。しかし、ここは彼にとっては期待外れだったようで、ほどなくしてカリフォルニア大学バークレー校に移籍。しかしここでも彼の興味・関心は満たされず、結局大学院を辞して空軍に入隊、カリフォルニア州パークスにある空軍基地で教職に就いた。仕事は楽だったので、暇な時間にスタンフォード大学に行き、気の赴くままに講義を聴講していたという。1955 年のことである。

そしてここでディックはフレデリック・スピーゲルバーグ教授の授業を聴講することになる。そう、数年前にマイケルが大きな影響を受けた東洋宗教学の権威である。聴講をきっかけに東洋の宗教に俄然興味を抱いたディックは、講義の中で名前の挙がったアラン・ワッツの講演を聞きに行き、西洋心理学と日本の禅仏教を統合して新たな哲学を構築しようとしているワッツのカリスマの虜となる。そしてワッツが講師の一人であったサンフランシスコの「アジア研究所」（American Academy of Asian Studies）にも顔を出すようになるのだが、当時サンフランシスコはビート・ジェネレーションの詩人・作家たちのたまり場のようになっていて、ワッツの講義にはローレンス・ファーリンゲティ（Lawrence Ferlinghetti, 1919-2021）、アレン・ギンズバーグ（Allen Ginsberg, 1926-97）、ジャック・ケルアック（Jack Kerouac, 1922-69）、ゲーリー・スナイダー（Gary Snyder, 1930- ）といった面々も顔を出していた。つまりワッツの周辺には当時のアメリカの最先端の思想・芸術が渦巻いていたのであり、ディックがその思想的ダイナミズムに引き込まれたのも無理はない。いつしか彼は仏教に夢中になり、曹洞宗の僧侶になることまで夢想した。

が、急速な東洋宗教への接近や、周囲を渦巻くビート的感性に当てられたのか、この頃からディックの精神は変調を来し始める。まずアジア研究所で知り合った友人の中国人ジア・フ・ヘン（Gia-Fu Feng, 1919-85）のガールフ

レンド（ボニー）と自分が結婚するという「天の声」を聴き、実際、出会ってから数か月後に結婚してしまうのだ。そして片や宗教の猛勉強、片や新婦との熱愛の狭間で精神異常を発した彼は 3 カ月の入院･加療を余儀なくされ、電気ショック療法や向精神薬ソラジンの処方を受けることとなる。

それだけではない。裕福な父親の介入もあって、1956 年 12 月、ディックはコネティカット州にある悪名高い私立クリニック「生活研究所」（The Institute of Living）に転院させられ、59 回もの「インシュリン・ショック療法」を受けさせられるのだ。これは空腹時に大量のインシュリンを投与し、強制的に低血糖のショック状態を創り出して昏睡させ、1 時間後にグルコースを頸静脈に注射して覚醒させるという統合失調症向けの荒療治で、結果的に電気ショック療法以上のダメージをディックに与えることになった。[22] しかもこの間、ディックは両親によって強制的にボニーとの結婚を解消させられている。

ディックはこのクリニックに 1 年間入院し、その後、叔父の経営する広告関係の販売代理店で無気力なサラリーマン生活を 3 年ほど続けた後、1960 年 5 月、ジア・フ・ヘンなどサンフランシスコ時代の友人たちに呼ばれて彼の地に舞い戻る。そしてその友人たちから面白いから会ってみろと勧められ、当地の瞑想センターで出会ったのが、当時サンフランシスコのゴールデンゲート公園近くにアパートを借りて住んでいたマイケル・マーフィーだったのである。

## 二人の計画とオルダス・ハクスリー

マイケル・マーフィーとディック・プライス。この二人は出会った時から気が合った。何しろ共に 1930 年生まれで年齢が一緒、1952 年にスタンフォード大学心理学専攻を卒業したのも一緒、軍隊での生活を経験していることも一緒、宗教や東洋思想に惹かれ、僧侶の生活に憧れたことも一緒、裕福な家族の出であることも一緒、そして両者ともその裕福な家庭の中の「クローゼットの中の骸骨」的な存在で、定職にも就かずに 30 歳代を迎えようとしていたのだから、共通点が多すぎるくらいである。そしてこの共通点の多い二人の友誼の中から、マーフィー一族が所有するビッグ・サーの温泉地で、

宿泊施設を経営するというアイディアが生まれるのだ。だが、彼らが目指したのは単なる宿泊施設の経営ではなかった。そうではなくて、この宿泊施設を新しい文化、否、革命的な文化の発信地にするというアイディアが、二人に取り憑いたのである。

アイディアの元はその一年前、1959 年にディック・プライスが聴いたイギリスの作家オルダス・ハクスリー（Aldous Leonard Huxley, 1894-1963）の講演であった。この講演の中でハクスリーは「人間の可能性」((Latent) Human Potentialities）について語っていた。

ハクスリー曰く、生物学者の説では、石器時代の人間と現代の人間では、脳の構造などはほとんど変わらない。しかし、両者の間に挟まる 2 万年の間に、人間は素晴らしい文明を生み出してきた。つまり、2 万年前に可能性として潜在していた多くのものを、人間は今日までに現実化してきたということになる。またそうであるならば、人間の中には今もなお多くのものが「可能性」として潜在しており、それが現実化されるのを待っているのだと考えてもおかしくない。事実、神経学者によれば、人間は脳のニューロンの 10% しか活用していないそうであるから、もし正しい方法で人間の能力を活用するならば、今後、人間にはさらに多くのとてつもないものを期待してもいいはずである、と。

ハクスリーの言う「人間の可能性」というのはこのような意味であって、実に希望に満ちた人間観であり、また実に自己啓発的。しかも情報通のハクスリーは、フレデリック・パールズが開発した「ゲシュタルト心理療法」のことを既に知っていたし、フレデリック・マサイアス・アレクサンダー（Frederick Matthias Alexander, 1869-1955）の提唱するボディ・ワークである「アレクサンダー・テクニーク」であるとか、ウィルヘルム・ライヒの弟子たちが開発しつつあった「バイオエナジェティック療法」などについても聞き及んでいた他、1953 年にはサボテンから抽出される「メスカリン」という麻薬を使った意識拡張実験を自ら体験するなど、新規な人間能力開発法への大きな期待を抱いており、これらを総合的に研究すれば、人間の能力を飛躍的に高めるための「正しい方法」を確立できるのではないかという青写真まで持っていたのである。

そしてこのハクスリーの自己啓発思想にディック・プライスは、そしてマイケル・マーフィーは、大いに蒙を啓かれたわけである。二人は三十歳にもなってまだ何も成し遂げてはいなかったが、ハクスリーの「人間の可能性」説に接し、自分たちにもこれから何かを成し遂げる「可能性」は十分にあると分かった。そこで二人はハクスリーに手紙を認め、ビッグ・サーにあるマーフィー家所有の「スレート温泉」を、人間能力開発の拠点になるような文化的発信地にできないかを相談するため、当時南カリフォルニアに住んでいた彼との面談を求めた。それに対しハクスリーは、二人の有望な企画を励ましつつ、たまたまその時にカリフォルニアを離れているので会うことはできない、その代わりサンタモニカで親友のジェラルド・ハード（Henry FitzGerald Heard, 1889-1971）に会って、彼からアドバイスをもらうといい、と回答した。

そこでマイケルとディックはこのアドバイスに素直に従ってサンタモニカに行き、ジェラルド・ハードなる人物と面会したのだが、二人は会った途端にこのエネルギッシュなアイルランド人に魅了されてしまった。何しろハードはヴェーダンタ哲学の西洋への紹介者の一人であって東洋思想には詳しかったし、ヨガや瞑想の実践者でもあって、その点でもマイケルやディックと多くの共通点があった上、1930 年代初頭には「エンジニア学習グループ」（The Engineers Study Group）なる自己啓発団体の創立に関わり、1950 年代半ばには「セコイア・セミナー」（Sequoia Seminars）という人間能力開発研究所の主要メンバーを務めるなど、マイケルとディックがこれからやろうとしていることを先取りしたような事業にも参画していた。そうしたこともあってハードは若い二人の企図を激賞し、マイケルとディックの方も、ハードに激励されたことによって、まだ手を付けてすらいない自分たちのプロジェクトの成功を確信する。[23]

かくして 1962 年、海沿いの鄙びた「スレート温泉」は、オルダス・ハクスリーとジェラルド・ハードの精神的支援を受けながら、温泉施設付きの宿泊所、兼、人間の可能性を追究する研究所へと変貌を遂げることとなった。「エスリン研究所」の誕生である。ちなみに「エスリン」とは、かつてこの地を支配したネイティヴ・アメリカンの部族の名前（The Esselen）にちなんだも

ので、石器時代から続く人類の継続的進化を信奉するマイケルとディックからすれば、百年足らずの歴史しかない「スレート温泉」という名称より、紀元前 2600 年まで遡れる「エスリン」の方がふさわしいと思われたのだろう。

**アラン・ワッツから始まる**

とはいえエスリンは、「研究所」とは言い条、しかつめらしい「学府」として発足したのではない。そうではなくて、眼前に太平洋を見晴らす崖にある温泉を楽しみつつ、地元の食材を使った美味しい食事を楽しむことのできる場所、すなわち「リトリート（retreat；退却場所、静養地）」としてスタートしたのだった。何しろエスリン研究所のあるビッグ・サーは、自伝的小説『北回帰線』（*Tropic of Cancer,* 1934）などで知られる作家ヘンリー・ミラー（Henry Miller, 1891-1980）が 1944 年から 1962 年まで 18 年に亘って隠棲していたことからも分かるように、20 世紀初頭から芸術家たちの「避難所」として知られていたし、ロスアンゼルスとサンフランシスコを結ぶ海沿いの風光明媚な 1 号線を行き交う旅人からすれば、つい立ち寄りたくなる場所なのだ。だからこそ、その地の利を生かし、基本的には居心地のいい宿泊施設として運営しつつ、時に応じて著名な研究者を招聘し、人間の能力開発や意識拡張といったテーマでセミナーやワークショップを開催してもらって、そうした文化的な催しを呼び物にしようというのが、マイケルとディックがエスリン研究所を開設したそもそもの狙いだったのである。

そしてその記念すべき第一回目のセミナーとなったのが、1962 年 1 月に開催されたアラン・ワッツのセミナーであった。このセミナーには 25 人ほどの参加者が集まったが、彼らは皆、ワッツのリラックスした、しかも流暢で洗練された見事な講演ぶりに魅せられたという。エスリン研究所の門出としては、まずまずの成功であった。[24]

そしてここから、いわゆるエスリン研究所の「古典時代」が始まる。著名な学者が次々とエスリン研究所を訪れてはその居心地の良さに感銘を受け、そのことをあちこちで吹聴して回り、それに呼応してさらなる大物学者がやって来るといった好循環が起きた時代。無論、最初にここを訪れた大物は、オルダス・ハクスリーである。彼は研究所の創立者であるマイケルとディッ

クのメンターであり、また研究所が目指す「人間の可能性の追究」というアイディアの源泉でもあって、ハクスリー自身、この研究所の発足を我が事のように喜んでいたのだから、ワッツのセミナーと相前後して彼がここを訪れたのも当然であった。

**アブラハム・マズロー**

だが、それ以上に驚くべきことだったのは、1962 年の夏にアブラハム・マズロー（Abraham Harold Maslow, 1908-70）がエスリン研究所を訪問したことである。

マズローと言えば「人間の欲求の階層説（＝自己実現理論）」で知られ、1962 年には「精神分析」「行動主義心理学」と並ぶ「心理学の第三勢力」として「ヒューマニスティック心理学会」を起ち上げた俊英。マズローが提唱する「ヒューマニスティック心理学」とは、人間の幸福や人間の潜在的可能性を追究する心理学であり、それは先に述べたオルダス・ハクスリーの思想とも相まって、後に「ヒューマン・ポテンシャル運動」と呼ばれるようになる一つのムーヴメント――人間の潜在能力の十全な開花を目指す気運――を推し進める上での原動力ともなったものである。そしてそうした「人間の潜在能力の十全な開花」こそ、エスリン研究所が目指そうとしていたものでもあった。ゆえに、エスリン研究所にとってアブラハム・マズローは暗黙のメンターとも言うべき人物であったわけだが、そのマズローが開設間もないエスリン研究所にふらりと顔を出したというのだから、それは研究所にとって驚天動地の大ニュースであった。

しかも面白いことに、マズローがエスリン研究所を訪問したのは、まったくの偶然であった。マズローはエスリン研究所のことなど何も耳にしていなかったし、マイケル・マーフィーやディック・プライスとも何の面識もなかった。彼は妻と共にカリフォルニアの海沿いの 1 号線をドライブしていて、たまたま見かけた看板につられ、一夜の宿を借りにここに立ち寄ったのである。マズロー夫妻が研究所に入って来た時、受付に座っていたのはディック・プライスの友人である中国人のジア・フ・ヘンだったが、彼は宿帳に記された名前を見て飛び上がり、愛読していたマズローの著書『完全なる人間』を

持ってきて、これを書いたのはあなたか？ と問い、マズローがしかりと答えると、この偉大なる心理学者に対して深々とお辞儀をするや、「マズローだ！ マズローだ！　マズローだ！」と絶叫したという。[25] この大騒ぎに何事かと応対に出たディックは、本物のマズローがそこにいるのに腰を抜かしつつ、エスリン研究所が計画していることなどを説明したところ、マズローはその企図に対してすぐに好感を抱いた。そしてこの偶然の訪問以後、マズローは1970年に没するまで、エスリン研究所にとって最も有力な支持者にして最大の擁護者であり続けたのである。

**フリッツ・パールズの「ゲシュタルト療法」**

マズローのように偶然エスリン研究所を訪れて、その虜になる人がいるばかりでなく、自分の方から勝手に押しかけてきてそのまま居座ってしまう人もいる。「フリッツ」ことフレデリック・パールズがその一例である。[26]

先に言及したように、パールズはドイツ・ベルリンに生まれ、ベルリン大学医学部を卒業した精神科医。しかし、ユダヤ人であったことからナチス・ドイツの台頭を恐れて 1933 年に国外脱出し、以後オランダ、南アフリカなどを転々とする。元々はフロイト流の精神分析家として出発したが、1936年に国際学会でフロイト本人と短時間面会した際、御大から冷たくあしらわれたことからフロイト流の精神分析とは決別。1946 年からアメリカに定住し、1951年にかねてから実践してきたグループ・セラピーの方法論をまとめた主著『ゲシュタルト・セラピー（*Gestalt Therapy*）』を発表（ただしライターのポール・グッドマン（Paul Goodman, 1911-72）との共著）。これで「ゲシュタルト・セラピー」なる独自療法を確立したパールズは、療法の普及を目指してアメリカ各地で講演して回り、1960 年にはロスアンゼルスに居を移した。以上がエスリン以前のパールズの経歴であるが、その後 1963 年に初めてエスリン研究所でセミナーを開催した彼は、この研究所がすっかり気に入ってしまい、自分から研究所のレジデントになる（＝住み込む）ことを宣言し、そのまま居座ってしまったのだった。

パールズは押しが強く偏屈な性格ゆえ、マイケルやマイケルの弟のデニス、またジア・フ・ヘンなどエスリン研究所の専従スタッフはもとより、ここで

セミナーを開催する講師の人たちとも気が合わずトラブルになることも多かったが、本人はまったく意に介さなかった。その一方、何よりも重要なことに、パールズが研究所で定期的に行うゲシュタルト・セラピーは、少なくとも被験者からは評判が良かった。とりわけ研究所の創立者の一人であるディック・プライスは、かつて経験した精神的打撃からまだ立ち直っていないところもあり、ゲシュタルト・セラピーの治療効果に期待するところが大きく、一時はパールズの弟子のようになってしまった時期もあった。

ではパールズが開発した「ゲシュタルト療法」とは、実際にはどういうものなのか。[27]

先にも少し言及したように、ゲシュタルト療法では被験者の「過去のトラウマ」を探すことはしない。それよりも「今、ここ」に存在する自分の在り方に被験者の意識を向け、その状況を意識的に言語化させることに重きを置く。そしてその言語化の過程で明らかになる当人の疎外状況／分裂状況を当人に自覚させ、分裂した自己を再統合する作業をさせることで、被験者が陥っている精神的不安から立ち直らせることが、この療法の狙いということになる。

実際のセラピーでは一室に集まった十人ほどの被験者の内、一人を中心的な被験者としてパールズの隣の席（ホットシート）に座らせ、その被験者にパールズが問いかけたり、指示を出したりする形でセラピーが進行する。

セラピーは、パールズがホットシートに座った被験者に最近見た夢の話をさせることから始まることが多い。そして、たとえば「火山の夢を見た」という被験者がいた場合、パールズはその被験者にその火山になりきることを命じ、その上で「今、何を感じているか」を報告させる。仮に被験者が「今、自分は噴火したい」と答えたならば、「では噴火しろ」と命ずる。パールズの理論では、夢に登場する事物とは、夢を見た当人の一部、すなわち疎外され分裂してしまった「断片」に他ならない。だからその事物を自分自身であると認め、その事物になりきることは、分裂して自分の元から離れていってしまった自分自身の一部を、再び自分の元に引き戻すことに等しい。先の例で言えば、被験者自身が火山のつもりになって「噴火」することで、疎外され、分裂してしまった自分の怒りや悲しみを追体験し、そのことによってバラバ

ラになっていた自分を再統合するのである。

パールズがゲシュタルト療法を行なっている様子は、現在、YouTube などで見ることができるが、上に述べた一例からも分かるように、この療法は表向きグループ・セラピーの体裁を取りながら実際には一対一のセラピーであり、パールズとホットシートに座らされた一人の被験者の間で繰り広げられる対話（＝芝居）を、他の被験者たち（＝観客）に見せる形で進行する点で、非常にダイナミック、かつ演劇的である。そしてこのパールズの開発したきわめて演劇的なゲシュタルト療法は、エスリン研究所を代表する呼び物の一つとなっていくのである。

**アイダ・ロルフの「ロルフィング」**

フリッツ・パールズがエスリン研究所にもたらしたものは、自身のゲシュタルト療法だけではなかった。「ロルフィング」をはじめとするボディ・ワークもまた、ある意味ではパールズがエスリンに持ち込んだものである。[28]

アイダ・ロルフが開発したロルフィングがいかなるものであるかについては、本論でも既に述べたが、このボディ・ワークを開発したアイダ・ロルフは、ニューヨーク出身の女性である。コロンビア大学から博士の学位を得た歴とした生化学者であるが、その一方、オステオパシー（整骨医学）やカイロプラクティクやヨガといった代替医療にも興味を持っていた。そして 1940 年代から独自の研究を続けた結果、彼女は歪んだ筋膜に手や肘などを使って圧をかけ、その歪みを修正することで身体のみならず精神のバランスを整えることができることを発見する。そして 1950 年以降、ロルフはこの独自の施術法に「構造の統合」（Structural Integration）なる名称を与え、これを世に広めるための活動を細々と続けていたが、その過程で本来の名称は失われ、いつしか開発者の名前から「ロルフィング」と呼ばれるようになったのだった。

フリッツ・パールズは、ロスアンゼルスに居住していた時、たまたま自分が開催したセミナーにロルフの弟子が参加しており、パールズの身体の不調を耳にしたその弟子からロルフィングの施術を受けたことで、その存在を知った。そしてその絶大なる効果に感銘を受けたパールズは、自身がエスリン

研究所のレジデントになったことを機にニューヨークに居たアイダ・ロルフをエスリンに呼び寄せ、自身もその施術を受ける恩恵にあずかると同時に、彼女に研究所でロルフィングの実践セミナーを行わせた。そしてそのセミナーが好評をもって迎えられたことから、アイダ・ロルフのセミナーはエスリン研究所の呼び物となり、それまで長い間、知る人ぞ知るボディ・ワークであったロルフィングの世間的な知名度は一気に上がったのである。そしてこれをきっかけとしてロルフィング以外のボディ・ワーク、たとえばフレデリック・マサイアス・アレクサンダーが開発した「アレクサンダー・テクニーク」や、シャーロット・セルヴァー（Charlotte Selver, 1901-2003）が開発した「センサリー・アウェアネス」、さらにはエスリン研究所の初期スタッフの一人、ジア・フ・ヘンが行なう太極拳の実践講座もまた、心身の不調を改善し、より良い人生を実現させるための実効力のある方策として、エスリン研究所を代表する呼び物となっていくのである。

**ウィル・シュッツと「エンカウンター」**

「ゲシュタルト療法」「ボディ・ワーク」と並んでもう一つ、エスリン研究所の主要な呼び物となるものは、ウィル・シュッツ（William Schutz, 1925-2002）という人物がもたらした。[29]

ウィル・シュッツはシカゴに生まれ、1951 年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で博士号を取得した後、シカゴ大学やハーバード大学、カリフォルニア大学バークレー校、アルバート・アインシュタイン医科大学などで教鞭を執った精神科医。哲学や社会学などにも造詣が深く、アブラハム・マズローやアイダ・ロルフの影響も受けるなど、学際的なバックグラウンドを持った人物である。

そのシュッツがエスリン研究所と関係するようになったのは 1966 年。この年、彼は初めてエスリン研究所のセミナーを担当し、翌 1967 年にニューヨークのアインシュタイン医科大学を辞してエスリン研究所の専任スタッフとなった。有名大学の確固とした地位を捨て、西海岸の得体の知れない研究所の専任となったことをシュッツの知人たちは訝しがったが、シュッツ自身はこれが人生最良の選択であると思っていた。彼はエスリン研究所が推し進

めていた「ヒューマン・ポテンシャル運動」に関わることは有意義であると思っていたし、有名大学の教授になるより、ここの専属となりつつ、その一方でフリーランス的に活動した方が、彼自身の全国的な知名度を上げるためには有利であると考えたのである。シュッツは精力的で、かつ、計算高い人物だったのだ。

シュッツがエスリン研究所で行なったのは、「エンカウンター」と呼ばれる宿泊プログラムである。エンカウンターというのは、アブラハム・マズローと共にヒューマニスティック心理学の発展に寄与したカール・ロジャーズの考案になる集団心理療法で、その実施方法には様々なタイプがあるが、シュッツは「オープン・エンカウンター」と呼ばれるタイプのエンカウンターを主として行なっていた。これは 10 名から 15 名程度からなる不特定グループを数日間に亘って一室に集め、特に話題を定めることもなくメンバー同士の自由闊達な会話を促しつつ、その会話の中に現出する賛同や反発、共感や敵対、支配や被支配など、様々な人間関係を体験・観察することによって、社会と個人の共存関係について理解を深めていくことを目的とする。

注目すべきは、ただ会話をすることだけがエンカウンターではない、ということである。例えば「対立」がテーマになった場合、グループ内で特に意見の分かれることの多い二人を選出し、それぞれ部屋の両端に立たせ、そこから互いに歩み寄らせる、という遊びを行わせることがある。これは「ハイヌーン」（＝「決闘」の意）と呼ばれるものなのだが、「敵同士」が段々近づいてきて、いよいよすれ違う時に二人が何をするか――無視し合うのか、掴み合いをするのか、それとも握手をして和解をするのか――は、当人同士のその刹那の感情や判断に委ねられる。そして二人が実際に起こした行動を元に、「今、何が起こったのか」を話題にして討論が再開される。先に紹介したフリッツ・パールズの「ゲシュタルト療法」と同様、ウィル・シュッツの「エンカウンター」もまた、相当に演劇的なのである。ちなみに、1967 年に行なわれたシュッツの 1 回目のエンカウンター・セッションにはアブラハム・マズローも参加しており、アメリカ心理学会の重鎮すらもシュッツのエンカウンターに注目しているというニュースは、シュッツとエスリン研究所の盛名を高めるために一役買った。

否、それだけではない。シュッツがエスリンの専属になった直後に出版した『よろこび』(*Joy: Expanding Human Awareness*, 1967) という本は、人間にとって最高の「よろこび」である自己実現・自己充足をいかにして獲得するかを、難解な心理学の用語などを使うことなく語り尽くしてベストセラーとなった本であるが、この本が話題になり、シュッツがテレビのトークショーなどに引っ張り出されたことで、シュッツ及びエスリン研究所の盛名は西海岸に留まらず、ニューヨークをはじめとする東海岸にも広まった。実は『よろこび』に書いてある内容自体はシュッツのニューヨーク時代の研究の賜物だったのだが、それを読んだ読者は「エスリン研究所に行ってシュッツのエンカウンターに参加すれば『よろこび』が得られる(らしい)」という印象を抱いた。「エスリン」と「シュッツ」と「エンカウンター」をセットで売り込もうというシュッツの狙いは、まんまと達成されたのである。

**マスコミへの露出とサンフランシスコへの進出**

そしてアラン・ワッツやアブラハム・マズロー、フリッツ・パールズやアイダ・ロルフ、それにウィル・シュッツと、大物役者の顔ぶれが揃い始めた頃から、エスリン研究所はヒューマン・ポテンシャル運動の牙城として、マスコミに取り上げられるようになっていく。

エスリン研究所が最初に有力マスコミに登場したのは、『タイム』誌 (1967 年 9 月 29 日号、69 頁) に出た短い記事 (“Learning: School for the Senses”) である。そしてこれに続いて『ニューヨーク・タイムズ』誌 (1967 年 12 月 31 日号 119 頁、Leo E. Litvak, “A Trip to Esalen Institute--; Joy Is the Prize Joy Is the Prize”) と『ライフ』誌 (1968 年 7 月 12 日号 48-65 頁、Jane Howard, “Inhibition Thrown: A new movement to unlock the potential of what people could be – but aren’t”) が、それぞれエスリン研究所で各種セミナー/ワークショップに参加した記者による体験記を掲載した。特に『ライフ』誌の記事は、セミナー/ワークショップの参加者たちが、男女を問わず全裸で温泉に浸かっている写真を掲載したことも含め、実に読者の目を射る内容であった。

また取材されるだけでなく、エスリン研究所は 1969 年から「エスリン・ブックス」と銘打った叢書の出版も行うようになった。これは研究所の主要

スタッフの一人であるスチュアート・ミラー（Stuart Miller, 1938-2014）が中心となって始まった企画で、問題行動を起こす児童をゲシュタルト療法で矯正するノウハウを綴ったジャネット・レダーマンの『怒りと揺り椅子』（Janet Lederman, *Anger and Rocking Chair: Gestalt Awareness with Children*, 1969）[30] であるとか、エスリン研究所の活動を記録するドキュメンタリーとしてミラー自身が書いた『ホット・スプリング』（Stuart Miller, *Hot Spring*, 1971）など、研究所の成果を外部へ向けて発信するための有効な媒体となった。

エスリン研究所の勢いは止まらない。エスリン研究所がマスコミに取り上げられ始めた 1967 年の秋、マイケルはエスリン研究所の支部をサンフランシスコの町中に設立する。これは、サンディエゴの「カイロス（Kairos）」やニューヨークの「オーレオン（Aureon）」、あるいはシカゴの「オアシス（Oasis）」など、エスリン研究所によく似た自己啓発団体（いわゆる「グロウスセンター（growth center）」）が全米各地の都市部に設立され始めたことへの対抗措置という意味合いがあり、さらにエスリン研究所の支部を都市部（＝下町）に設置することによって、「富裕層のためのリゾート施設」という研究所のイメージをある程度払拭する狙いもあった。もっともそれらは後付けの理由であって、人の出入りが激しくなり、複雑になる一方のエスリン研究所の人間関係に、マイケル自身、嫌気がさしてきた、というのが本当のところであったかもしれない。要するにマイケルはサンフランシスコの町中に研究所の支部を作り、自らがそこの所長となって駐在することで、ビッグ・サーの人間関係から一定の距離を置こうとしたのである。[31]

いずれにせよ、結果としてみると、エスリン研究所のサンフランシスコへの進出は、1960 年代末のサンフランシスコに蔓延していた「ヒッピー・ムーヴメント」ないし「カウンター・カルチャー」と、エスリン研究所に代表されるヒューマン・ポテンシャル運動の交流・接続につながった。と言うのも、ヒッピー・ムーヴメント／カウンター・カルチャーとヒューマン・ポテンシャル運動は、共に「東西文化の融合」と「精神と身体の調和」を謳い、これらを通じた「人間の進化による現状打破」を目指していた点で、元々非常に似通ったところがあったからである。

たとえばエスリン研究所の指向性の一つである「東西思想の融合」について言えば、当時のアメリカでサンフランシスコ以上に東西文化／東西思想が入り混じっていた町はなかった。何しろサンフランシスコには北米最大・最古の中華街があるし、日系人も多かった。また東洋思想の面から言えば、ここには桑港寺という曹洞宗の禅寺があって、1959 年にここの住職となった鈴木俊隆が日系人のみならずアメリカ人の間に禅を広めることに力を入れたため、1960 年代から 70 年代にかけてアメリカの禅ブームの中心地となっていた。[32] そして禅ブームはそのまま瞑想ブームへとつながり、サンフランシスコには瞑想のための施設が幾つも作られていたし、そもそもマイケル・マーフィーとディック・プライスが初めて出会ったのも、そのような施設の一つにおいてであった。

また「精神と身体の調和」という点について言えば、後に『スポーツと超能力』（*The Psychic Side of Sports*, 1978）なる著書（レア・A・ホワイトとの共著）[33] を出すほどスポーツ好きのマイケルは、エスリン研究所サンフランシスコ支部の目玉として「スポーツ・センター」を設立し、もって「スポーツを通じた精神と身体の調和」を追究することを同支部の売り物としていたが、こうしたマイケルの意図を最もよく理解し受け入れる人々がいたとしたら、それは当時サンフランシスコ界隈にコミューンを作って住んでいたヒッピーたちであっただろう。なぜならカウンター・カルチャーを担ったヒッピーたちもまた、サーフィンやフリスビー、ジョギングやワークアウト、さらにはヨガや合気道など、勝ち負けを競うのではなく、健康を維持し精神を研ぎ澄ますことを目的としたスポーツを推奨・享受してきた経緯があるからである。マイケルが『王国のゴルフ』という神秘的スポーツ小説を書こうと思い立ったことの背景に、オイゲン・ヘリゲルの名著『弓と禅』（Eugen Herrigel, *Zen in der Kunst des Bogenschiessens*, 1948）の存在があることは疑い得ないが、ヘリゲルのこの本はサンフランシスコのヒッピーたちにとっても必読書の一つであった。

さらにもう一つ、エスリン研究所とサンフランシスコの間にある文化的親和性の例として挙げられるのは、幻覚剤に対する許容性の高さである。

1960 年代のアメリカ西海岸では人間の能力の飛躍的拡大に期待する気運

が高まっていて、サイロシビンや LSD などの幻覚剤を使った意識拡張実験が政府公認で行われており、エスリン研究所のメンターたるオルダス・ハクスリーやジェラルド・ハードも早くからこの種の実験に私的に関わっていたし、もちろんマイケル自身も LSD の使用経験があった。となれば、エスリン研究所の初期のセミナー／ワークショップの中に幻覚剤の効果を論ずるものがあったのも不思議ではなかろう。一方、サンフランシスコでは、1966 年に LSD が非合法化された後も、アウグストス・オーズリー・スタンリー三世（Augustus Owsley Stanley III, 1935-2011）なる人物が自家製造した高品質の LSD が大量に出回っていて、ヒッピーたちの間では幻覚剤の使用は半ば日常化しており、1967 年にサンフランシスコのゴールデンゲート・パークで開催されたカウンター・カルチャーの祭典「ヒューマン・ビーイン」（Human Be-In）において、元ハーバード大学准教授で幻覚剤研究の第一人者ティモシー・リアリー（Timothy Francis Leary, 1920-96）が “Turn on, tune in, drop out ” という「幻覚剤解放宣言」とも言うべきスローガンを獅子吼した時には、そこに集まった 3 万人のヒッピーの大群衆は歓呼の声を上げた。[34] つまりエスリン研究所とサンフランシスコ界隈の人々は、幻覚剤なるものの可能性に期待し、それを受け入れようとしていた点で同じ精神的土壌を共有していたのである。事実、後に大麻所持の廉で有罪となり獄中の人となってしまったティモシー・リアリーに対してもマイケルは友好的な態度を崩さず、一時は彼をエスリン研究所の上級研究員として迎える案すら持っていたという。

**エストの誕生**

このようにエスリン研究所とサンフランシスコという土地柄には共通点が多く、研究所の進出はサンフランシスコの住民たちに当たり前のように受け入れられたし、またそのことによってサンフランシスコの町全体が、研究所が推進するヒューマン・ポテンシャル運動に加担していくことにもなった。具体的に言えば、エスリン研究所サンフランシスコ支部の拠点となったユニオン・ストリート周辺には、エスリン研究所で学んだ経験のある「卒業生」たちによって設立されたゲシュタルト療法の研究所やエンカウンターの診療所、ダイエット教室や鍼灸院、ボディ・ワークを教える教室などが次々と作

られたのである。そしてサンフランシスコにこの手の自己啓発施設が次々と誕生しているという噂はマスコミを通じてすぐに広まり、それに興味を抱いた人々を全米から引き寄せることとなった。

そしてその中でも特に大きな話題となったのが、1971年にユニオン・ストリートに設立された「エスト」（既述）であった。

エストの創立者ワーナー・エアハードは、以前からエスリン研究所に頻繁に出入りしていた人物で、ウィル・シュッツのエンカウンターに参加し、フリッツ・パールズに会い、シャーロット・セルヴァーのセンサリー・アウェアネスや東洋武道も体験し、アラン・ワッツから禅を習っていた。特にワッツに魅せられたエアハードは、ワッツの喋り方や独特の笑い方まで真似ていたという。そしてエスリン研究所での経験から、自己啓発セミナーというものに商機を見出した彼は、ここで学んだ様々なセミナーやワークショップのノウハウをアレンジし、本論でも先に描写した集団圧迫面接風の自己啓発セミナー／ワークショップを呼び物にするエストを起ち上げ、急速に勢力を拡大していった。それだけではない。エストの勢力が拡大するにつれ、エアハードはまるでエストがエスリン研究所の公認団体であるかのようにマイケル・マーフィーに近づいてその友人となり、マーフィーがエストを訪れると上機嫌で上等のワインでもてなし、書棚に並べたシュリー・オロビンド全集を自慢げに見せびらかした。

一方、マイケルの方はと言うと、エアハードという人物の個性と魅力をある程度は認めつつ、急速な勢いで会員を増やしていくエストに若干の懸念を抱いていた。エストの圧迫面接風のセミナーのやり方には権威主義的なところがあって、それは自己啓発セミナーの本来在るべき姿からは程遠いとマイケルには思えたし、またそれ以上にエストがヒューマン・ポテンシャル運動の様々な成果を寄せ集めて一体化し、アメリカナイズした上で一般大衆に売り始めたこと――要するにヒューマン・ポテンシャル運動をビジネスにしたこと――を苦々しく思っていたのである。[35]

### アリカの進出

エストに加えてもう一つ、「アリカ」（既述）もエスリン研究所を通じてサ

ンフランシスコに進出していた。[36]

アリカのサンフランシスコ進出のキーマンとなったのは、クラウディオ・ナランホ（Claudio Benjamin Naranjo Cohen, 1932-2019）というチリ人の精神科医。彼はサンフランシスコにほど近いカリフォルニア大学バークレー校で研究活動に従事していたのだが、そこで大学院生をしていたカルロス・カスタネダ（Carlos Castaneda, 1925?-98）と出会ったことで、一つの転機を迎えることになる。カスタネダはヤキ・インディアンの呪術師ドン・ファンの弟子となり、その体験を記した『ドン・ファンの教え』（*The Teachings of Don Juan*, 1968）でアメリカ社会に大きなインパクトを与えた人物だが、そのカスタネダに誘われ、二人してエスリン研究所を訪問したところ、そこでフリッツ・パールズのゲシュタルト療法に遭遇し、この療法の虜になってしまうのだ。その後ナランホはゲシュタルト療法の療法士となり、1960 年代後半からの数年間、エスリン研究所が開催するゲシュタルト・セミナーの主要な講師の一人ともなった。

ナランホにとってもう一つの転機となったのは、1970 年に半年ほどチリに戻った際、アリカ・スクールの創立者オスカー・イチャーソに会ったこと。イチャーソはアルメニア出身の神秘学者ゲオルギイ・グルジエフ（George Ivanovich Gurdjieff, 1866-1949）の研究者でもあり、同じくグルジエフの影響を受けていたナランホはイチャーソに惹かれ、彼の指導の下、アリカで集中講習を受けることを約した。そして一時ビッグ・サーに戻ったナランホからイチャーソの噂を聞いたエスリン研究所のスタッフたちもこれに興味を示し、結局 30 人以上のスタッフがチリのアリカ・スクールで修行することになってしまった。[37] スタッフが大挙してアリカに行ってしまったことに面食らったディック・プライスは、「アリカはエスリンを空っぽにした」と嘆いたという。だがこの時、大勢のエスリン研究所スタッフの指導をしたことは、アリカ・スクールにとっても一つの契機となった。アメリカ人が潜在的受講生になりうるという手ごたえを得たイチャーソは、1971 年にアリカ・スクールの本拠地をニューヨークに移すのだ。アリカはエスリンを空にしたかもしれないが、エスリンもまたチリのアリカを空にしたのである。

それだけではない。その後、ナランホは師であるイチャーソに破門され、

両者は袂を分かつことになるのだが、アメリカに戻ったナランホは、いわば師に無断でアリカの修行システムをエスリン研究所やカリフォルニア大学バークレー校をはじめとするサンフランシスコ周辺の研究施設にもたらしたのである。とりわけイスラム神秘主義（スーフィズム）に起源を発し、グルジエフやソビエト連邦の神秘思想家P・D・ウスペンスキー（Pyotr Demianovich Ouspensky, 1878-1947）を通して伝えられ、それをイチャーソが理論化した性格分類法（とそれに基づく人格向上法）である「エニアグラム」をナランホがアメリカ西海岸に紹介したことの意味は大きく、その後エニアグラムはナランホの弟子であったヘレン・パーマー（Helen Palmer）の著書『エニアグラム』（*The Enneagram: Understanding Yourself and the Others in Your Life*, 1988）によってさらに広く紹介され、今日あるような形でアメリカに定着することとなった。[38]

このようにエストも、アリカも、またアリカの教義の一部であるエニアグラムも、エスリン研究所とその関係者の直接／間接の媒介なしには、アメリカには広まらなかったと言っていい。そしてエストやアリカのみならず、それに類するありとあらゆる自己啓発団体が、ヒューマン・ポテンシャル運動の名の下に、アメリカ西海岸、とりわけサンフランシスコ周辺に根を下ろしたのである。

だから1972年、34歳のジェリー・ルービンが、新しい自分に生まれ変わるべく、自己改革に打ち込もうと決意した時、まずサンフランシスコに居を移したのは、当たり前だったのだ。当時のルービンに必要だったものは、すべてここ、サンフランシスコにあったのだから。そしてそうした状況の背後に、エスリン研究所の存在があったのである。本論の中ほどで筆者は「なぜこれほど多くの自己啓発的試行錯誤を、ルービンはサンフランシスコで経験することが出来たのか」という疑問を発し、それに対して「そこにエスリン研究所があったから」と答えておいたが、その答えの真意がここにある。

**スキャンダル**

以上述べてきたように、エスリン研究所は、1962年の創立時から一貫してヒューマン・ポテンシャル運動の牙城となり、何かまったく新しい文明がこ

こから始まるのではないかという期待を当時の多くのアメリカ人に与え続けた。そして実際、ジェリー・ルービンのように、エスリン研究所に端を発した様々なヒューマン・ポテンシャル運動の流れに身を浸したことによって、過去の自分と決別し、新しい人生に飛び込んでいくための準備を整えた人たちが居たことは間違いのない事実である。

しかし、だからと言ってエスリン研究所がいささかの瑕瑾もない無謬の団体であったと言うわけではもちろんない。それだけ人々の期待を集める団体であったからこそ、毀誉褒貶に晒されることもまた多々あった。

エスリン研究所をめぐるスキャンダルの始めは、1968 年 1 月に起こった。当時エスリン研究所が開催し始めたばかりの「宿泊プログラム」の卒業生で、その後研究所のサンフランシスコ支部で働くようになったロイス・デラトルという女性が、MDA という麻薬を摂取したことが原因で死亡したのである。前述したようにエスリン研究所はティモシー・リアリーをはじめとする麻薬文化の支持者たちとつながりがあったし、LSD や MDA のような合成麻薬が研究所を訪れる人たちの間でやり取りされることに関して比較的寛容であった。そうした中で研究所の関係者が麻薬摂取で亡くなったとなると、たとえそれが当人の責任に帰することであるとはいえ、若干の弁明をマスコミに対して行う必要が生じたのも必然であった。

しかし、それだけではなかった。同年に開催された第 2 回目の宿泊プログラムの参加者であり、やはり研究所の事務員であったマーシャ・プライスという女性が、研究所の敷地内の駐車場に止めたクルマの中で、ライフル銃を使って自殺したのだ。彼女はフリッツ・パールズの患者であり、愛人でもあった。また 1969 年には、同じくフリッツ・パールズのゲシュタルト療法のワークショップに参加していたジューディス・ゴールドという女性が、ホットシートに座らされ、フリッツから罵倒された後、研究所内の温泉で溺死しているのが見つかった。当のパールズはこうした事態に関して表向き無関心を通したが、エスリン研究所で行われているワークショップの中に危険すぎるものがあるのではないかという批判が世間に出始めたのも当然であろう。[39]

**チャールズ・マンソン事件**

だが、同じ 1969 年、エスリン研究所はセミナー参加者の相次ぐ死よりもさらに大きなスキャンダルに巻き込まれることになる。チャールズ・マンソンにまつわるスキャンダルがそれである。[40]

チャールズ・マンソン（Charles Milles Manson, 1934-2017）は、ビーチ・ボーイズのメンバー（デニス・ウィルソン）とも親しいミュージシャンであったが、人心掌握術に長けており、サンフランシスコのヘイト・アッシュベリーで暮らしている内にその界隈のヒッピーたちの中に彼の熱烈な信奉者が現れ始め、いつしか「マンソン・ファミリー」と呼ばれるヒッピー・コミューンが作られるようになった。マンソンはそのコミューンの絶対的リーダーとして君臨していたが、コミューンの生計はドラッグの売買や詐欺などの犯罪行為によって成り立っており、それらに関わったメンバーが次々と警察に逮捕されるようになって、マンソンの焦燥は募った。加えてサンフランシスコのヒッピーたちと生活を共にし、彼らが希求する時代の閉塞感の打破、来るべきパラダイム・シフトへの願望などを共有する中で、彼らのリーダーとして何らかの暴力的な革命（マンソンの言葉を使えば「ヘルター・スケルター」）を起こさなければならないという妄想に駆られるようになる。追い詰められたマンソンは、自身の目指す革命のきっかけを作るべくメンバーに殺人行為を教唆、かくして 1969 年 7 月と 8 月に合わせて 7 件の殺人事件が起こってしまったのである。特にアメリカの有望若手女優であり、映画監督ロマン・ポランスキーの妻で妊娠中であったシャロン・テートとその友人 3 人が、スーザン・アトキンスら 3 人のマンソン・ファミリーに殺害された 8 月 9 日の事件は、その陰惨さから全米を震撼させた。

問題は、事件の全容が解明される中で、殺人事件の首謀者チャールズ・マンソンがエスリン研究所のセミナーの受講者だったのではないか、という噂が出たことである。無論そのような事実はなかったが、そのような噂が出る下地はあった。チャールズ・マンソンはシャロン・テート殺害事件の 3 日ほど前に、実際にエスリン研究所の敷地内にいたのだ。その時、マンソンは 1 号線をクルマで走っていてエスリン研究所の前を通りかかり、そこで即席のコンサートを開くことにした。当時のエスリン研究所には、そうした見ず知

らずの人からの急な催しの申し出を受け入れるだけの鷹揚さがあったのである。コンサートは不調に終わり、マンソンは早々に退散することとなったが、彼がエスリン経由で殺人事件を起こしたという事実は残った。それだけではない。シャロン・テートの邸宅でシャロンと共に殺された友人、アビゲール・フォルジャー（アメリカの有名なコーヒー会社「フォルジャーズ」の社長の娘）は、歴としたエスリン研究所のセミナー体験者で、警察がシャロン・テートの家の電話の通話履歴を調べたところ、エスリン研究所への通話記録が幾つも残っていた。陰惨な殺人事件の被害者と加害者、双方がエスリン研究所に出入りしていたことが明らかになれば、悪い噂が出るのも当然だろう。

無論、実際にはエスリン研究所とチャールズ・マンソンが関わった連続殺人事件は無関係なのだから、噂は噂で終わった。しかしチャールズ・マンソンが抱いたヘルター・スケルター的革命の妄想は、たとえそれが極端に歪められたものであったとしても、ヒューマン・ポテンシャル運動が目指す新しい文明への憧憬に端を発するものであって、その意味からすればエスリン研究所とチャールズ・マンソンがいかなるレベルにおいてもまったく無関係であった、とまでは言い切れない。いずれにせよ、この種のスキャンダルが重なったことは、1967 年から 1968 年にかけてエスリン研究所の盛名がマスコミを賑わせるようになったことに伴う反動であり、またヒューマン・ポテンシャル運動自体が持つ負の側面の表出でもあった。

### メンターたちの相次ぐ死

1960 年代末に相次いだスキャンダルに加え、1970 年代に入ったエスリンでは、研究所の精神的支柱とも言うべき主要スタッフの死が重なり、これもまた研究所の運営にとっては大きな支障となった。[41] 特に大きな痛手だったのは、フリッツ・パールズが 1970 年に亡くなったことである。

もっとも、パールズは 1970 年の時点で既にエスリン研究所のレジデントではなくなっていた。その前年、1969 年に彼はエスリン研究所を辞し、カナダに新たなゲシュタルト療法研究所を設立していたのである。無論、この背景には、長年に亘るエスリン研究所でのレジデント生活の中で蓄積してきた人間関係のいざこざに飽きていたということもあり、また彼のセミナー受講

者が相次いで自殺するというスキャンダルの影響も若干はあったが、それ以上にエスリン研究所での実績を踏まえ、自分が開発したゲシュタルト療法の効果にますます自信を抱いていたパールズとしては、思い切って新天地に研究所を設立し、そこで自分の思う通りに活動したいという野望があった。しかし、残念なことに、元々健康面に問題を抱えていた上、当時既に 75 歳を超えていた彼には、カナダでもう一旗揚げるだけの時間は残されていなかった。

1970 年はまた、アブラハム・マズローが亡くなった年でもあった。エスリン研究所の後ろ盾的な存在であったということもそうだが、その前年にスタニスラフ・グロフ（Stanislav Grof, 1931- ）と共にトランス・パーソナル心理学会を設立したばかりで、これから心理学の新たな分野を開拓する途上にあっただけに、62 歳での早すぎる死はアメリカにとって、就中エスリン研究所にとって、あまりにも大きな損失であった。

早すぎる死という言葉は、1973 年 11 月に 58 歳で亡くなったアラン・ワッツにも当てはまる。東西の文化・宗教にまつわる膨大な知識を融合させた独自の宗教思想を築き、巧みな話術・文章力でそれらを表現してやまず、しかも権威的であることを拒み、自由人であり続けた知的エンターテイナー。エスリン研究所の運営には一切かかわらず、フリッツ・パールズとウィル・シュッツの間にあったような研究所内での勢力争いなどにも興味がなく、信奉者を増やそうという意思もなく、ただ研究所でセミナーを開催したり、和服を着て好きな時に鐘を撞いたり、温泉に浸かって夕日を眺めたりするのを楽しんだ、愛すべき男の死であった。

## 下降線

そして幾つものスキャンダルと、研究所を代表する知性の相次ぐ死を経た 1970 年代半ばあたりから、世間がエスリン研究所に向けるまなざしに、批判的なものが混ざるようになってきた。研究所が纏うつもりもなく纏ってきた神秘のヴェールの裾にわずかな綻びが生じたことから、その綻びをもっと大きくしてやろうという悪意が、さがない世間に生まれたのである。[42]

たとえば「エスリン研究所で行われている種々のセミナーやワークショップに政治的な観点が脱落している」という批判の声が大きくなってきたのも

この頃の話。確かにエスリン研究所でセミナーやワークショップを開催した人たちのメンツを見ると、ロルフィングのアイダ・ロルフや太極拳のジア・フ・ヘンなどの数少ない例外を除いて女性や東洋人が極端に少なかったし、黒人に至っては一人も居なかったのだから、こうした状況が「政治的でない（＝政治的に正しくない）」として批判されても致し方ないところではある。

「政治的でない」ということは、裏を返せば「個人的である」ということでもある。事実、ジェリー・ルービンのケースがそうであったように、エスリン研究所を訪れる人の大半は、自分自身の個人としての問題を解決するためにそうしたのであって、それが研究所本来の在り方であった。しかし、そのことを批判的に見るならば、エスリン研究所に集う人たちは、こぞって底なしのナルシストなのだ、と言えないこともない。1970 年代を「個人重視（ミーイズム）の時代」と規定したジャーナリストのトム・ウルフは、1976 年、『ニューヨーク』誌において「エスリンの方法は、自分にとって最も大切な『自己』を弄ぶためにここ 10 年ほどの内に現れた典型的な道具である」という言い方で、エスリン支持者たちのナルシシズムを痛烈に批判した。否、トム・ウルフの批判は揶揄的である分、まだ手ぬるい方で、ロチェスター大学の歴史学者クリストファー・ラッシュ（Christopher Lasch, 1932-94）の批判はさらに直接的であった。彼は「（エスリン研究所などヒューマン・ポテンシャル運動系諸団体で追究されている）『自己の気づき運動』は現代アメリカ社会に蔓延している病弊の最も純粋な表現であり、そこでは社会や歴史といった観念は放り出され、それに代わって自分自身をもっぱらにすること、あるいは自分自身の飢えを癒すことだけに努める風潮が見られる」という言い方で、エスリン的なるものを糾弾したのである。[43] そしてこれらエスリン研究所に対する否定的な見解があちこちから発せられたのと軌を一にするように、映画『ボブ＆キャロル＆テッド＆アリス』（*Bob & Carol & Ted & Alice,* 1969）や、小説『シーリアル』（*The Serial: A Year in the Life of Marin County,* 1976）など、ヒューマン・ポテンシャル運動に夢中になっている人々を揶揄するような映画・小説なども作られるようになった。

そして外部からの批判は、エスリン研究所内部の調和を乱すことにもつながった。

個性的で我が強く、それぞれに一家言を持つ思想家・研究者の集まりである研究所では、元々意見の対立が多かったが、研究所の創立者であるマイケル・マーフィーとディック・プライスが健在であった頃には、そうした対立もさほど表面化することはなかった。しかし、研究所の創立から十年以上が経つ頃になると、この二人の研究所における存在感にも、ある程度の揺らぎが生じてきたのだ。

たとえばディックは、1971 年に突然、ビッグ・サーにおけるエスリン研究所の運営から手を引くと宣言し、アリカ・トレーニングを受けるためにニューヨークに旅立ってしまった。しかも後を任されたジュリアン・シルバーマン（Julian Silverman）が、それまで明確なルールもなく運営されていた研究所の方針を改め、より厳密な運営方法に変えてしまったため、その新方針が性に合わなかったウィル・シュッツがエスリンを離脱してしまった。ディックのいささか無責任な行動により、研究所はまた一人、看板リーダーを失うこととなったのである。[44]

問題はディックだけではない。マイケルの方もこの時期に一つ、勇み足的なミスを犯している。それは 1973 年に彼の肝煎りで開催した「精神とセラピーにおける専制主義」という会議のこと。エスリン研究所は創立以来十年の間にヒューマン・ポテンシャル運動の牙城となってきたわけだが、研究所が推し進めるこの運動の一つの成果として現れてきたものの中には「エスト」や「アリカ」といった権威主義的な自己啓発団体が含まれていて、これらがヒューマン・ポテンシャル運動の目指す自由で開かれた人間能力開発の道を阻害することにつながっていた。この会議は、こうした状況の問題点を明確にし、ヒューマン・ポテンシャル運動及びそこから派生した各種自己啓発団体が内包する危険に警鐘を鳴らす目的で開かれたのである。

会議の趣旨は素晴らしいものだった。ところが、実際の会議では、エストやアリカのこと以上にエスリン研究所が主催する様々なセミナー／ワークショップに対する従来秘められてきた不満が噴出する結果となり、会議はさんざんなものとなってしまった。しかもこの時の会議の紛糾ぶりは、その後ピーター・マリン（Peter Marin）が『ハーパーズ』誌（1975 年 10 月号）に寄稿した「新ナルシシズム」（“The new narcissism”）という論文の中に記され、

表に出てしまった。[45]

それば かりではない。マイケル・マーフィーは、この会議の準備段階で紛糾を予見し、実際の会議が始まる直前にエスリン研究所の所長を辞任したのだ。後任にはリチャード・ファーソン（Richard Farson）が任命されたが、彼もまた足並みが乱れ始めたエスリン研究所を一つにまとめることはできず、間もなく辞任することとなった。[46]　しかも研究所が存亡の危機にあえぐ最中、もう一人の創立者であるディック・プライスは、研究所の再建に立ち上がるどころか、1977 年、インドの精神的指導者バグワン・シュリ・ラジニーシ（Bhagwan Shree Rajneesh, 1931-90）の講演を聞いて思うところがあり、ヒンズー教の托鉢僧になることを期してインドのプーナに出かけてしまったのである。[47]　そしてマスコミは、どこか神秘的な存在として「アンタッチャブル」であった二人の創立者、マイケルとディックの存在感の低下をいいことに、ここぞとばかりエスリン研究所の悪口を言い出し、その弱体化を言揚げした。『マイアミ・ヘラルド』紙は研究所を「暗く、薄汚い場所」（“A Dark and Dirty Place”）と罵り、ニューヨークのタウン誌『ヴィレッジ・ヴォイス』は「エサレン：その緩慢なる死」（“Esalen: A Slow Death”）と銘打った記事を出して、その死期を早めようとした。[48]

要するに 1970 年代も後半に差し掛かる頃には、エスリン研究所は空中分解しそうになっていたのである。

## その後

だがエスリン研究所が空中分解することは、なかった。それどころか 1980 年代に入って、研究所の存在感は一時的に復活する。

きっかけは 1980 年、マイケル・マーフィーが力を入れて推進していた「スポーツを通じた精神と身体の調和」というエスリン研究所の呼び物の一つが、ソビエト連邦の指導者の目に留まったこと。その結果、ソビエト大使館の一等書記官ヴァレンティン・ベレズコフがエスリン研究所を訪問するという「事件」が起こり、この訪問を通してこの問題をアメリカとソ連が共同で研究する協定が結ばれ、最終的には大掛かりな国際会議が開催されるに至ったのである。「スポーツの精神科学」というエスリン研究所得意の題目を軸に、冷戦

状態のピークにあった米ソ両国が協力し合うという歴史上の一幕があったのだ。そしてその後もエスリン研究所を介したアメリカとソビエト連邦／ロシアの交流は続き、1982 年には衛星通信を使った両国市民の対話チャンネル「U.S.-Soviet Space Bridge」が設立された他、1989 年には後のロシア大統領ボリス・エリツィンをエスリン研究所がアメリカに招き、ジョージ・W・H・ブッシュ大統領との会談を成功させている。[49] 政治的でないことを批判され続けてきたエスリン研究所ではあるが、1980 年代に入って突如、期せずして国際政治の檜舞台に上がることもあったのだ。

**エスリン研究所が成し遂げたこと**

とはいえ、それは様々な偶然が重なった上でのこと。その後 1990 年代に入ってから今日まで、エスリン研究所がどのような意味であれ「檜舞台」に上がるということはなくなった。エスリン研究所は今もビッグ・サーにひっそりと存続し、様々な自己啓発的イベントを行なってはいるが、その活動にヒューマン・ポテンシャル運動華やかりし 1960 年代後半頃の興奮と熱気が残っているとは言えない。

しかし、かつてのジェリー・ルービンがそうであったように、エスリン研究所が主催する自己啓発的セミナー／ワークショップを必要とする人々は、21 世紀を迎えた今でもなお一定数存在する。そしてそういう人々のニーズに応えるべく、研究所は活動を続けている。事実、最盛期に年間 2 万人以上の訪問客を集めたエスリン研究所は、2010 年代に入っても年間 1 万人程度の訪問客を迎えているという。[50] 1960 年代に全米各地に作られた「グロウスセンター」の大半が消えた今ですら、これだけの訪問客を迎えていること自体、この研究所が特別な存在であることの証と言っていい。

では、その「特別な存在」たるエスリン研究所が成し遂げたこととは、一体何だったのか。

この点については、同研究所の花形リーダーの一人であったウィル・シュッツが 1979 年に公刊した『すべてはあなたが選択している』（*Profound Simplicity: Foundations for a Social Philosophy*）という本の冒頭に綴った文章がすべてを語っているように思われる。少し長いが、ここに引用してみよ

う。

人類は新しい時代に直面しようとしている。一九六〇年代のアメリカでは社会や行政における様々な「革命」が起こったが、それは一九七〇年代の「気づきの革命」に取ってかわられた。この試みから新たな気づきの境地が生まれており、これこそが最も重要なものではないかと思う。その気づきとは、私は自分の人生を自分で決めているのだという意識である。（中略）

「気づきの革命」は数箇所で始まったが、中でも最も注目を集めたのは、アメリカ西海岸を中心にひろがったヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメントだった。この運動により、はじめはカリフォルニア、次にアメリカ全土、そして最後には世界中に、人間の潜在能力を発揮させるための様々な理論や手法が知られるようになった。（中略）

このような関心の高まりの中で、それぞれの手法や理論は数々のベストセラー書を生み、信奉者たちが増えていった。エンカウンター・グループ、ゲシュタルト心理療法、ロルフィング、交流分析、生体エネルギー法、トランセンデンタル・メディテーション、サイコシンセシス、アリカ・トレーニング、リラクゼーション、呼吸法、太極拳、合気道、アレクサンダー・テクニーク、フェルデンクライス・メソッド、トレガー・アプローチ、ジョギング、断食、ヨガ、サイキック・セラピー、サイエントロジー、プライマル・セラピー、est 等の手法とそれらを提唱する指導者や学者たちは、皆六〇年代後半から七〇年代前半のどこかでアメリカの地を踏み、その後アメリカ全土に広がったヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメントによって有名になった。

人間の潜在能力を高め「生活の質」を追求しようとする試みが、いささか情報過多の様相を呈したことに対する世間の反応は賛否両論であった。この動きが人類のさらなる向上と進化につながるに違いないと確信する人もいれば、これらの手法はどれも一瞬人気が出たと思ったら直ぐに消え去る運命にある流行の一種で、まるでフラフープみたいなものだと馬鹿にする人もいた。

しかし実際には、マスコミに取り上げられることは確実に減ったものの、これらの手法は決して消え去りはしなかった。どんな手法も最初は「目新しさ」からマスコミによってもてはやされ、ひとしきり衆目にさらされたが、その後はアメリカ国内外の目立たない場所にまで人知れず浸透していった。ヒューマン・ポテンシャルから生まれた数々の手法は、現在では世界中にありとあらゆる場所、刑務所、学校、教会、病院、会社、精神療法、劇場、スポーツ・チーム、政治、カウンセリング、結婚生活、子育て、楽団などで活用されている。(中略)

ヒューマン・ポテンシャルから生まれた理論や手法に共通する考え方こそ、人間がこれまでに抱えてきた数々の悩みを解決する、希望の光なのではないかと私は思う。これらの概念が実現しえることには、畏怖の念すら覚える。この考え方を現代社会に応用すれば、国家までが変わるだろう。医療はさらに洗練され幅が広がり、政府は最初のうちこそ混乱状態に投げ込まれるだろうが、そのうちにはこれまでにない明瞭で実直なものに生まれ変わるだろう。法律、福利厚生の取り組み、経済、スポーツ、宗教、税金制度、家族生活、教育、産業、そして人間関係、いや、それだけでなく私たち人類の運命までもが、深遠なる影響を受けるかもしれないと私は考えている。[51]

確かに今日、エスリン研究所の活動がマスコミに注目されることはほとんどない。しかしそのことは、必ずしも研究所が過去の遺物となったということを意味するのではない。むしろ、上の文章でウィル・シュッツが喝破しているように、その成果が既に人間社会の様々な場所で活用されており、当たり前のものとなっているからこそ、それを最初に世に問うたエスリン研究所のことが忘れられかけているのであろう。その意味で、エスリン研究所がアメリカ社会に、あるいは世界に、どれほど大きな貢献をしたのかということについては、今後さらに深く検討される必要があると言っていいだろう。井戸の水を飲む時には、その井戸を掘った人のことを思うべきなのだから。

**ジェリー・ルービン**

本論の最後に、本論の主役の一人であったジェリー・ルービンのその後について一言しておこう。

本論で述べた数々の自己啓発的試行錯誤の後、ルービンは一体何を思ったのか、1970 年代後半に入って突如ビジネスの世界に身を投じ、ウォール街の株式仲買人となった。かつて天井からドル札を撒き散らして大混乱を引き起こしたニューヨーク証券取引所に、スーツとネクタイ姿で堂々と出入りするようになったのである。

しかし 1980 年代に入って金融ブローカー稼業に飽きた彼は、今度は若い起業家同士が情報交換できるような場を提供する事業に興味を抱き、ビジネス・ネットワーク構築のためのパーティーを主催する会社の運営を始める。若い頃からそうだったが、結局、ひとところに安住していられないのがジェリー・ルービンという男なのだ。

しかも、それで終わりではない。1990 年代に入り、自身 50 歳を超えた頃、人間の寿命を延ばすことに俄然興味を抱いたルービンは、再び西海岸に居を移し、長命効果を持つ栄養サプリメントや栄養ドリンクの開発と販売に取り組み始める。自己啓発的試行錯誤時代に栄養のことにはさんざん気を使ったのだから、いよいよその時の経験を活かす時が来たとばかり、この新企画にルービンの心は勇躍したに違いない。

だが運命の 1994 年 11 月 14 日、彼はロスアンゼルス郊外のウェストウッドにある自宅アパート前のウィルシャー通りで、オートバイに轢かれるという悲劇に見舞われてしまう。わずか 56 年の、せかせかした急ぎ足の人生であった。[52]

3 年間に亘る自己啓発的試行錯誤を経て、アメリカで最も有名な革命家から一転して証券マンに、そして最後は起業家へと転身し、振れ幅の激しい人生を送ったジェリー・ルービンは、オートバイに轢かれる刹那、果たして自らの人生に満足して「Yes」と言えたのだろうか？

それは誰にも分からない。ただ、かつてアメリカ中の若者たちを反逆の道に引き入れ、「やっちまえ！（Do it!）」とけしかけたルービンのことである。檜舞台に上がった千両役者よろしく、予想外の自らの死を前にして少しも怯むことなく、外連味たっぷりに「俺はやってやったぜ！（I did it!）」と嘯きな

がら死んでいったと想像しても、さほど見当外れではあるまい。

## 注

1　ジェリー・ルービン著　田中 彰訳『マイ・レボリューション』(Jerry Rubin, *Growing (Up) at 37* (Warner Books,1976)の全訳)、めるくまーる、1993 年、13 頁。以下、ルービンの愛車破壊に付随するエピソードについては本書第 1 章「天国と地獄」を見よ。

2　ジェリー・ルービン著　田村隆一・岩本 隼共訳　金坂健二解説『Do iT!(やっちまえ)—革命のシナリオ—』都市出版社、1971 年。

3　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』13-14 頁。

4　ルービンの革命家時代のエピソードについては、上記『Do iT!』及びウィキペディア（日本語版・英語版）の記述を参考にした。

5　ルービンの恋人ルーシーとの別れの一件については、ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』9-10 頁に拠った。

6　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』12 頁。

7　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』17 頁。

8　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』18-21 頁。

9　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』9 頁。

10　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』34-35 頁。

11　ルービンのロルフィング体験、およびバイオエナジェティック療法体験については、ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』第 4 章、「ボディー・ワーク入門」を見よ。

12　ルービンのゲシュタルト療法体験については、ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』第 5 章、「愛は執着か？」を見よ。

13　ルービンのフィッシャー・ホフマン心霊療法体験については、ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』第 10 章、「フィッシャー・ホフマン心霊療法」を見よ。

14　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』181 頁。

15　ルービンのエスト体験、及びワーナー・エアハードについては、ジェリー・ル

ービン『マイ・レボリューション』第 13 章、「今この瞬間を見よ」を見よ。なお、ワーナー・エアハードについてはウィキペディア（日本語版・英語版）の情報も参照した。

16　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』200 頁。

17　ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』203 頁。

18　ルービンのアリカ体験については、ジェリー・ルービン『マイ・レボリューション』第 14 章、「頭より体で考えよ！」を見よ。なお、オスカー・イチャーソについてはウィキペディア（日本語版・英語版）の情報も参照した。

19　W.T. アンダーソン著　伊藤 博訳『エスリンとアメリカの覚醒』(Walter Truett Anderson, *The Upstart Spring: Esalen and The American Awakening* (Addison-Wesley Publishing Company,1983)の全訳)、誠信書房、1998 年、335-336 頁。

20　マーフィー家がスレート温泉を買ったいきさつ、マーフィー家とジョン・スタインベックとの関係、及びエスリン研究所設立以前のマイケル・マーフィー、ディック・プライスの経歴等については、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 2 章の記述に拠った。

21　マイケル・マーフィー著　山本光伸訳『王国のゴルフ』(春秋社、1991 年)。この小説の中で主人公の「マイケル」は、スコットランドにある「バーニング・ブッシュ」というゴルフコースで、伝説のゴルファー、シーヴァス・アイアンズ（Shivas Irons）と出会い、彼にゴルフの手ほどきを受けたり、後には彼から預かったノートの記述をたどる形で、ゴルフというスポーツの奥義を垣間見る、というストーリーになっている。ここでシーヴァス・アイアンズの造形は、東洋的な超越的指導者のそれであり、本作はスポーツ小説というよりは神秘哲学の本のような趣になっている。

22　ハリウッド女優で 1940 年代には「最も美しい 48 女優」の異名をとったジーン・ティアニーや、1944 年に自殺を試みた女優のクララ・ボウが入院させられたのもこのクリニックで、彼女らもここで電気ショック療法を受け、そのために相当なダメージを受けている。

23　マイケル・マーフィーとディック・プライスがオルダス・ハクスリーの紹介でジェラルド・ハードに面会するくだりについては、『エスリンとアメリカの覚

醒』12-13 頁を見よ。

24　アラン・ワッツ、及び彼のエスリンでの 1 回目のセミナーについては、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 3 章、とりわけ 49 頁の記述に拠った。

25　アブラハム・マズローがエスリン研究所を始めて訪れたエピソードについては、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 4 章、とりわけ 63 頁を見よ。

26　フレデリック・パールズとエスリン研究所の関係については、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 5 章、及びウィキペディア（日本語版・英語版）に拠った。

27　ゲシュタルト療法の実際については、越智道雄著『アメリカ「60 年代」への旅』（朝日新聞社、1988 年）、95-96 頁の記述に拠った。越智道雄氏は 1986 年に実際にエスリン研究所を見学している。なお、パールズがゲシュタルト療法をしている映像は YouTube などで見ることができる。

28　アイダ・ロルフの「ロルフィング」とエスリン研究所の関係については、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』80-83 頁、及び 126-128 頁に拠った。

29　ウィル・シュッツとエスリン研究所との関係についてはW.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 8 章、とりわけ 149-160 頁を見よ。またシュッツのエンカウンターの実際については、越智道雄著『アメリカ「60 年代」への旅』（朝日新聞社、1988 年）、96-97 頁の記述に拠った。

30　ジャネット・レダーマンのこの本について、W.T. アンダーソンは *The Upstart Spring* の中で *Anger in the Rocking Chair* と記しているが、正しくは *Anger and the Rocking Chair* である。

31　マイケルがサンフランシスコ支部を作った経緯については、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』146-149 頁を見よ。

32　鈴木俊隆のサンフランシスコにおける活動については、尾崎俊介『14 歳からの自己啓発』（トランスビュー、2023 年）316-322 頁を見よ。

33　マイケル・マーフィー、レア・A・ホワイト著　山田和子訳『スポーツと超能力』（日本教文社、1984 年）。本書においてマイケルは、スポーツを究めた者

が体験する神秘体験や特殊能力、たとえば瞬間移動や空中浮遊、消える魔球などについて、実例を挙げながら説明している。本書には当然、弓道を究めたオイゲン・ヘリゲルにも言及がある。

34　1960 年代後半のサンフランシスコにおける幻覚剤文化については、尾崎俊介「自己啓発本として読む『ホール・アース・カタログ』」（『外国語研究』第 54 号、2021 年）を参照せよ。

35　エストとエスリン研究所のアンビヴァレントな関係については、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 13 章、とりわけ 249-251 頁、及び 267-271 頁を見よ。

36　アリカとエスリン研究所の関係については、W.T. アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 11 章、とりわけ 219-225 頁に拠った。またアリカのプログラムがエスリン研究所に伝わった経緯については、ウィキペディア「Claudia Naranjo」の記述に拠った。

37　この時アリカに向かったスタッフの中には、ジョン・C・リリー（John Cunningham Lilly, 1915-2001）も含まれる。イルカのコミュニケーションの研究者として出発し、後にサイケデリック研究に進んでアイソレーション・タンク（感覚遮断タンク）を考案した人物で、映画『イルカの日』（*The Day of the Dolphin*, 1973）や『アルタード・ステイツ／未知への挑戦』（*Altered States*, 1979）のモデルとなったことでも知られるヒューマン・ポテンシャル運動の立役者の一人である。ちなみにリリーが開発したアイソレーション・タンクを実際に体験した日本人の一人に評論家の立花隆がいる。立花の『臨死体験（上・下）』（文春文庫、2000 年、下巻 290-343 頁）によると、実際にアイソレーション・タンクに入ってみたところ、リリーの言うような体外離脱体験をすることはなかったが、身体とは別に意識だけが存在しているような、独特な気分を味わうことはできたという。

38　エニアグラムについては、ウィキペディアの記述に拠った。またエニアグラム全般については前田樹子『エニアグラム進化論：グルジエフを越えて』（春秋社、1994 年）を、またエニアグラムの実際については鈴木秀子『９つの性格：エニアグラムで見つかる「本当の自分」と最良の人間関係』（PHP 文庫、2004 年）を参照した。

39　エスリン研究所で起こったこれらの悲劇については、W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 10 章、とりわけ 196-200 頁を見よ。

40　チャールズ・マンソンとエスリン研究所の関係については、W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 12 章、とりわけ 233-235 頁、及びウィキペディア「Charles Manson」の記述に拠った。

41　エスリン研究所のメンターたちの死に関しては、W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』200-203 頁、207-209 頁及び 266 頁の記述に拠った。

42　エスリン研究所に対する世間の批判全般については、W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』第 14 章を見よ。

43　トム・ウルフ、及びクリストファー・ラッシュのエスリン研究所に対する批判については、W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』278-279 頁を見よ。

44　W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』236-244 頁。

45　W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』256-260 頁。

46　W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』260-265 頁。

47　W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』295-299 頁。

48　Michael Murphy, “Afterword,” in *On the Edge of the Future*, eds. Jeffrey J. Kripal and Glenn W. Shuck, (Indiana UP, 2005), p.305.

49　エスリン研究所を通じたアメリカとソビエト連邦／ロシアとの交流については、W.T．アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』305-308 頁、及びウィキペディア（英語版）「Esalen Institute」の中の「Soviet-American Exchange Program」の項を見よ。

50　エスリン研究所の年間訪問客数については、渡邊拓哉「再魔術化の文化研究－20 世紀後半期における自己変容の技術と欲望」（博士学位論文、名古屋大学大学院国際言語文化研究所国際多元文化専攻、平成 24 年 7 月提出）79 頁の記述に拠った。

51　ウィル・シュッツ著　株式会社ビジネスコンサルタント監修　池田絵実訳『すべてはあなたが選択している』（株式会社 翔泳社、2011 年）、52-58 頁。

52　ジェリー・ルービンの晩年及び事故死の状況については、ウィキペディア（英語版）「Jerry Rubin」に拠った。

## 図版

図 1　URL: https://ja.findagrave.com/memorial/3823/jerry-rubin#view-photo=249944

図 2　URL:https://search.yahoo.co.jp/image/search?p=George%20Edgerly% 20 Harris%20III&fr=top_ga1_sa&ei=UTF8&aq=#c725fc47e1dc7 f6c3b4 d793338d67153

（付記：本研究は JSPS 科研費 JP20K00387 の助成を受けたものである）